静岡大学情報学部行動情報学科卒業研究

演劇の演出技法を用いた
プレゼンテーションの制作

加藤 若菜(7061-2011)

2020年1月

指導教員:情報学部 湯浦克彦

要旨

情報化社会の発展に伴い、自分の意見や提案の伝達手段としてプレゼンテーションが多用されるようになった。学生の間でも活用されているプレゼンテーションの主な利用目的はメッセージの伝達だが、感情面でのアプローチを用いた効果的な伝達方法を学ぶ場が少ないというのが現状である。対して演劇は人前での発表というプレゼンテーションと類似した形態でメッセージの伝達を行い、その発表は観客に感情的な影響を多く与えることが可能である。演劇の中で演技を行うにあたり重要な役割を担っているのは演出の存在であり、この点がプレゼンテーションとの違いである。

本研究では、プレゼンテーションの意志伝達効果を向上させる為に感情的アプローチの方法を指導する、演劇内における演出の役割を追加する。プレゼンテーションにおける演出とは、プレゼンテーションの論理構成を効果的に伝達できるよう発表者の声や表情等の行動を示すガイドを指す。

そこでプレゼンテーションの制作手順に演劇の制作手順を導入した。まずプレゼンテーションの持つ論理構成を要素の持つ目的・効果毎に分類し、プレゼンテーションにおける演劇的な構造を作成する。次にプレゼンテーションを構成する感情的表現技法を四つに区分し、具体的な表現方法の指標を作成する。その上で二つの応用実験を行った。

一つ目の実験では演劇基本構造と表現技法の指標を基に二人の対象者に向けて演出技術を導入した講座を実施し、講座による感情表現の変化を評価した。結果として感情的表現は平均して向上させることに成功したが、論理構成に伴った表現技法の変化を観測することは困難だった。これは最初の発表内容が演劇基本構造に沿った形式ではないからだと考えられる。

二つ目の実験ではスキットを行う学生グループに向けて、論理構成を考える為のワークシートの配布、フィードバックの実施を行った。結果として対象グループの論理構成作成、構成要素の持つ目的・効果への理解促進に貢献したが、やはり表現技法の変化を促すことはできなかった。

以上二つの実験から、プレゼンテーションに演出を導入する為には正しい論理構成の作成・理解とプレゼンテーションにおける感情表現の具体的指標の両方が揃っていることが重要であることが分かった。

目次

第 1 章　序論 7
1.1　研究の背景 7
1.2　研究の目的 7
1.3　論文の構成 8
第 2 章　プレゼンテーションと演劇における演出の役割について 9
2.1　プレゼンテーションとは 9
2.1.1　プレゼンテーションの定義 9
2.1.2　プレゼンテーションの目的 9
2.2　学生のプレゼンテーション 10
2.2.1　学生におけるプレゼンテーションの重要性 10
2.2.2　学生のプレゼンテーションスキル育成の問題点 11
2.3　演出の役割 12
2.3.1　演劇の目的と効果 12
2.3.2　演劇の脚本と演出の関係性 12
第 3 章　プレゼンテーションへの演出技術の導入 15
3.1　プレゼンテーションの制作手順 15
3.2 演劇の制作手順 16
3.3　プレゼンテーションの制作手順と演劇の制作手順の比較 17
3.4　プレゼンテーション制作過程への演劇的要素の導入 17
3.5　演劇的プレゼンテーションの構成区分 20
3.6　本研究における演出の役割 21
3.7　プレゼンテーションでの感情的要素とその指標 21
第 4 章　大学生を対象とした演出的プレゼンテーション講座の実施 23
4.1　対象者とプレゼンテーションの内容 23
4.2　記入用ワークシートの準備 23
4.3　実際の講座内容 24
4.4　作成したガイドラインと演劇基本構造図 25
4.5　講座によるプレゼンテーションスキルの変化点 29
4.6　実施結果の分析、考察 31
4.6.1　講座による表現技法の変化 31
4.6.2　講座による演劇基本構成の変化 33
第 5 章　効果的なスキット作成に向けたワークシートの配布とフィードバック 36
5.1　対象者とスキットの内容 36
5.2　記入用ワークシートの作成、配布 37

5.3　スキットの基本構成 38
5.4　ワークシートを基にした論理構成へのフィードバック 39
5.5　フィードバック後の内容変化 40
5.6　参加者によるワークシートの評価 41
5.7　実施結果の分析、考察 42
第 6 章　結論 44
6.1　結論 44
6.2　演劇的プレゼンテーションへの改善策 44
謝辞 47
参考文献 48

図一覧

図 1　プレゼンテーションの目的と効果.....10
図 2　一般社団法人日本経済団体連合会ホームページ　Policy（提言・報告書）ページ　2018 年 11 月 22 日　新卒採用に関するアンケート調査結果 PDF より引用［4］.....11
図 3　演劇の目的と効果.....12
図 4　先行研究（金ヨンソ　プレゼンテーション製作法に関する学生向け学習方式[2016]）で作成された学習ホームページ内のプレゼンテーションガイド[6] 15
図 5　演劇の制作手順.....16
図 6　プレゼンテーションの制作過程への演劇的要素の導入.....18
図 7　導入する演劇的要素.....19
図 8　感情的なプレゼンテーションの演劇基本構造.....20
図 9　記入用ワークシート.....23
図 10　実施した講座の内容と手順.....24
図 11　対象者 A の第一回演劇基本構造図.....27
図 12　対象者 B の第一回演劇基本構造図.....28
図 13　対象者 A の第二プレゼンテーション演劇基本構成.....34
図 14　対象者 B の第二プレゼンテーション演劇基本構成図.....35
図 15　スキットの制作手順.....36
図 16　スキット作成ワークシート.....37
図 17　スキットの基本構成.....38
図 18　A グループワークシートの一部とそのフィードバック.....39
図 19　B グループワークシートの一部とそのフィードバック.....40
図 20　A グループの最終発表時の基本構成.....41
図 21　B グループの最終発表時の基本構成.....41
図 22　演出技術を導入するプレゼンテーション制作方法の改善案.....45

表一覧

表 1　プレゼンテーションにおける感情的要素と五段階指標 21
表 2　演劇基本構造単位の理想的な表現技法の指標 22
表 3　対象者 A に配布した理想的プレゼンテーションのガイドライン 25
表 4　対象者 B に配布した理想的プレゼンテーションのガイドライン 26
表 5　対象者 A の第一プレゼンテーション表現状態表 29
表 6　対象者 B の第一プレゼンテーション表現状態表 30
表 7　対象者 A の第二プレゼンテーション表現状態表 31
表 8　対象者 B の第二プレゼンテーション表現状態表 31
表 9　対象者 A の表現に対する評価 32
表 10　対象者 B の表現に対する評価 33
表 11　B グループからのワークシートに関する評価 42
表 12　C グループからのワークシートに関する評価 42

第 1 章　序論

1.1　研究の背景

情報化が進む昨今の社会では、他者に自らの意見や提案を伝達するツールとしてプレゼンテーションが多く用いられている。従来は企業が営業やマーケティングの中で自社製品のアピールの為に行うことが多かった。しかし今では大学の講義内でもプレゼンテーションによる発表が求められていることも多い。つまり学生時代に得たプレゼンテーションスキルや発表の経験が卒業後に社会貢献に役立つ可能性が大いに高い。

しかしプレゼンテーションの技術を学ぶ為の場というのは現段階ではあまり用意されていない。実際にプレゼンテーションの場を繰り返して経験を重ねていきスキルアップを目指すという原始的な方法のみでプレゼンテーション能力の向上を図るという場合が殆どである。プレゼンテーションに対して技術的な知識を取り入れる学習の機会が無い為、自分のプレゼンテーションにどのような問題があるのか、その問題を解決する為にどのような方法があるのかを認識できない人々が存在しているのが現状である。

また、人前での発表という点に着目するとプレゼンテーションに近しいものとして演劇が挙げられる。演劇というのは一つの脚本を基にその脚本を効果的に見せる為の演出をつけ、役者や機材を利用して観客にメッセージを視覚的、聴覚的に伝達する芸術作品である。ここでプレゼンテーションと演劇を比較するとその相違点の一つとして、メッセージをより明確に伝える為に存在する演出という役職があることが注目される。報告者は6年間演劇を行っており、特に演出の役職に多く携わってきた。その中で演出が行う演劇への指導は、演劇を構成する要素全体の根幹を大きく左右するものであることを学んだ。

1.2　研究の目的

本研究ではプレゼンテーションの意志伝達効果を高める為に演劇内における演出の役割の付与を行う。プレゼンテーションにおける演出とは、プレゼンテーションの論理構成を確認し、その論理を聴衆に最も印象的な形となるよう、発表者の声や表情等で示す行動をガイドすることを指す。

そこで、プレゼンテーションの論理構成を基に演出を加える手順を設定し、実際の学生によるプレゼンテーションや、スキット(寸劇)制作の指導の場に適用して実用性を評価する。

1.3　論文の構成

本論文は全6章から構成される。
第1章では、本研究の背景、目的を示し論文の構成を述べる。
第2章では、プレゼンテーションが持つ役割とその目的を説明し、現在の学生が行っているプレゼンテーションについて着目して問題点を述べる。また加えて演劇内での演出という立場の仕事内容やその役職が演劇自体に表す効果を説明する。
第3章では、プレゼンテーションと演劇の制作過程について調査し、二つの手順を比較する。その上で提案する演劇的要素の導入に従って、プレゼンテーションの発表に演劇的表現をガイドする為に作成した表現技法の具体的指標と演劇基本構造について述べる。
第4章では、実際にプレゼンテーションを行う学生を対象とした演出的プレゼンテーション講座の実施について述べる。
第5章では、スキットを行う学生グループを対象としたスキット作成用ワークシートの配布とそのフィードバック実施について述べる。
第6章では二つの実験結果を踏まえた考察と今後の課題、演劇的プレゼンテーションの実現に向けた改善案について述べる。

第 2 章　プレゼンテーションと演劇における演出の役割について

2.1　プレゼンテーションとは

2.1.1　プレゼンテーションの定義

プレゼンテーションとは「自分の考えを他者が理解しやすいように、目に見える形で示すこと」と大辞林の中で記述されている［1］。またナンシー・デュアルテの著書『Slide:ology　プレゼンテーション・ビジュアルの革新』では「プレゼンは組織内外で行われる重要なコミュニケーションのためのツール。それは多くの支持者の心を動かし、あなたや会社に対する印象を大きく左右します。」とも述べられている［2］。したがってプレゼンテーションというのは発表者が自らの情報や意見を限られた時間内で説明、説得をして聴衆に興味や関心を持たせ、最終的に聴衆の判断や意思決定を行うための双方向的なコミュニケーション手段のひとつであるといえる。

2.1.2　プレゼンテーションの目的

プレゼンテーションを行う主な目的は、情報の伝達を通して聴衆からの注目や関心を集め、与えられたメッセージにより聴衆達の行動や信念へ何かしらの変化をもたらすことである。そのような影響を与える為には視覚的、聴覚的にシンボライズされた刺激的な伝達用の形式が必要であり、聴衆に満足感を与えるように用いられているツールこそがプレゼンテーションそのものなのである。

下の図1はプレゼンテーションの過程と聴衆への効果を合わせて示したものである。

プレゼンターは自らの経験やアイディア・ノウハウ・提案・情報などの伝達したいメッセージをプレゼンテーションという形で聴衆に披露する。そして聴衆は受けたプレゼンテーションの中からプレゼンターのメッセージに注目し、理解や同意、満足度の決定、判断を行う。聴衆はそのプレゼンテーションを観測して決定した意思として自らの信念や態度、行動を変化させることで、プレゼンターと聴衆の間には体系的な伝達行為が成立し、プレゼンテーションによるコミュニケーションが完成することになる。

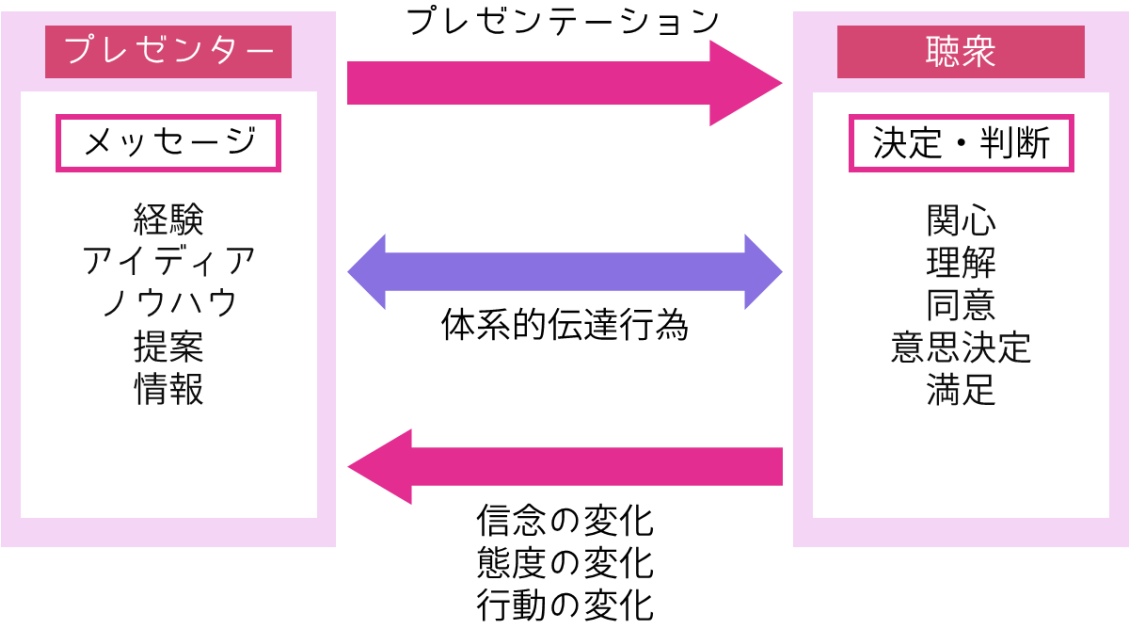

図 1　プレゼンテーションの目的と効果

2.2　学生のプレゼンテーション

2.2.1　学生におけるプレゼンテーションの重要性

山口は『卒業研究指導の一環として実施したプレゼンテーションスキル教育の試みとその教育効果』で「大学・高専といった高等教育機関においても、体系的なコミュニケーション技術教育の試みが行われるようになりつつある。」と述べており［3］、近年の教育現場ではコミュニケーションスキルの向上や口頭発表力の育成を目的としたプレゼンテーションの実施を含む講義展開が多く見られている。特に大学ではその傾向が顕著であり、実際に報告者(静岡大学情報学部行動情報学科)は自身が 4 年間受けてきたカリキュラム 73 科目の内 15 科目の中で計 33 回のプレゼンテーション発表を行った。プレゼンテーションでの発表を評価対象とした講義は多く存在し、学生の勉学においてプレゼンテーションは看過できないものとされている。

またプレゼンテーションスキルは学生が社会に出る際にも重要な役割を果たす。一般社団法人日本経済団体連合会が公表している「新卒採用に関するアンケート調査結果」［4］によると、2001 年は 50%程度の企業のみが重要視していたコミュニケーション能力を年々多くの企業が注目していくようになり、2018 年になると 80%以上の企業が新卒採用の選考時にコミュニケーション能力を重要視するようになった(図 2)。プレゼンテーションによる意思疎通・情報伝達といったコミュニケーション能力の向上が学生に促されている要因の一

つであるといえる。

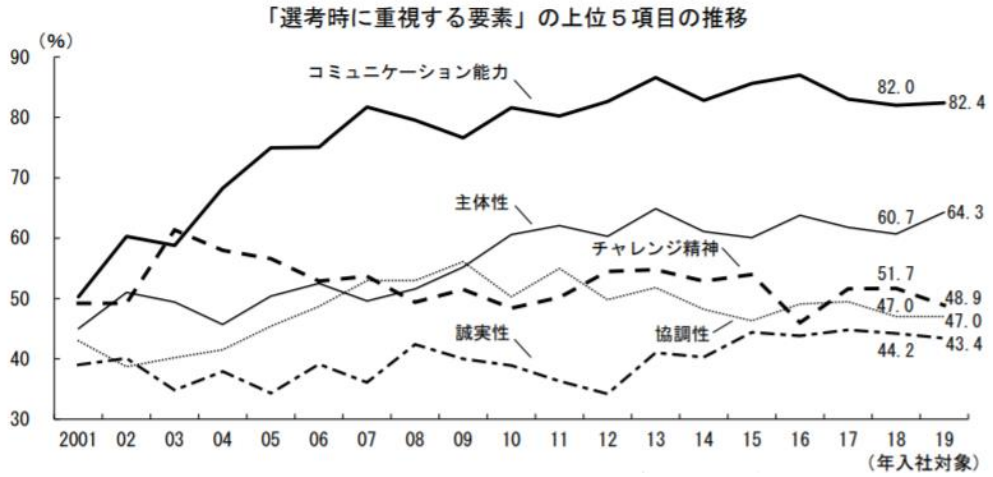

図 2　一般社団法人日本経済団体連合会ホームページ　Policy（提言・報告書）ページ 2018 年 11 月 22 日　新卒採用に関するアンケート調査結果 PDF より引用［4］

2.2.2　学生のプレゼンテーションスキル育成の問題点

ビジネスコンテストなどの課外活動に参加する学生の存在もあり、その活動内でもプレゼンテーションという手法は多用されている。だがそのようにプレゼンテーションの機会を多く持つ学生たちが実際にプレゼンテーションを技能的に学ぶような場所は大学のカリキュラム内には殆ど無く、多くの学生はプレゼンテーションスキルを独学で学ばなければいけない状態になっているのが現状である。

またそれだけではなく、仮に個人で参考書や学習サイトを見てスキルを磨こうとしてもそこで学べるのはプレゼンテーションで伝えるメッセージの決め方や情報の記述方法などストーリーラインの組み立て方、資料の作成方法についてのみという場合が多い。立ち振る舞いや姿勢、声量など話す内容に寄り添った表現技法はコミュニケーションにおいて相手の感情を変化させる重要な役割を持つ。だが現状だと、学生のプレゼンテーションスキルの育成において、発表する際に聴衆に感情的な影響を効果的に与える為の表現技法についてガイドラインを設立している学習方法は皆無に等しい。

つまり学生はコミュニケーション能力の一つとしてプレゼンテーションスキルを期待されている筈だが、そのコミュニケーション内で有効とされるような「効果的な情報の伝え方」を学ぶことが困難な状況に置かれているのである。

2.3　演出の役割

2.3.1　演劇の目的と効果

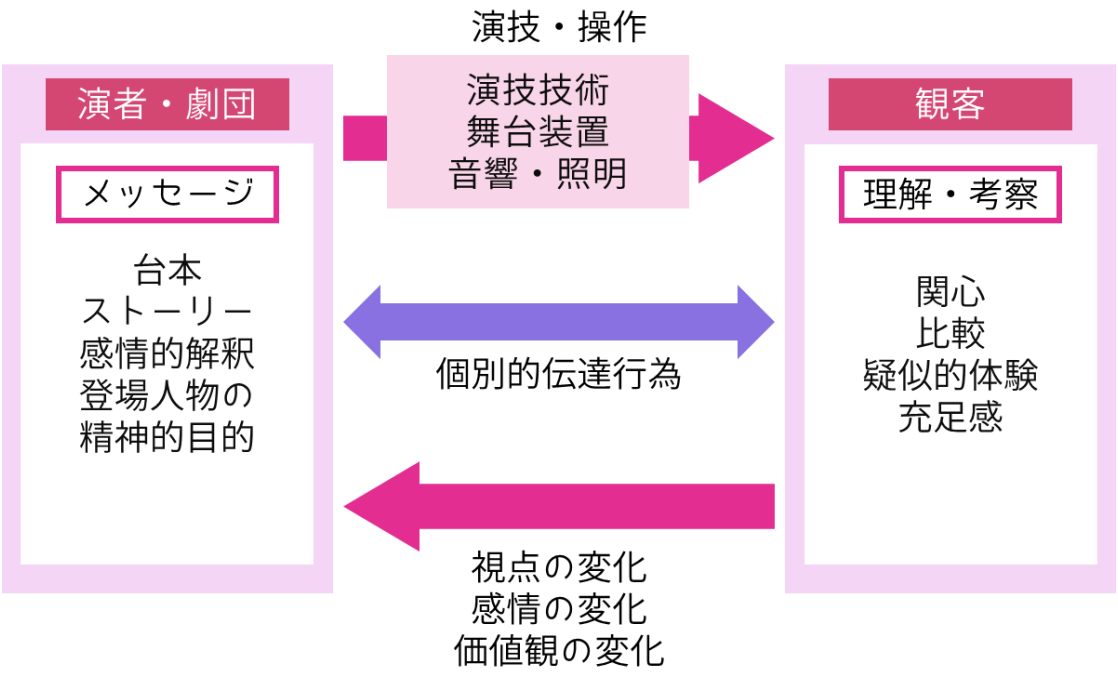

図 3　演劇の目的と効果

図 3 は演劇を行う際の劇団側の過程と観客側にもたらされる効果について表したものである。演劇を行う役者や劇団は多くの場合脚本の内容、ストーリーの持つメッセージを観客に伝え、観客側に感情的な影響を与えることを主な目的とする。演劇の大きな特徴というのはそのメッセージを伝える為に演技技術や舞台装置、音響・照明などの伝達手段を用いることである。観客はその演技や操作を通して劇団の演じる脚本内のストーリーをまるで自らが実際に体験したような感覚や充足感を味わい、観劇前とは異なる視点や価値観を得ることができる。演劇は芸術作品であると同時に劇団と観客の間で感情の共有やメッセージの伝達などをその劇団独自の方法で行う個別的な伝達行為を通したコミュニケーションの一つとしても機能を果たしているのである。

2.3.2　演劇の脚本と演出の関係性

脚本とは演劇・映画・放送などで演出のもととなる台詞やト書きなどを書いた本のことであり、台本とも呼ばれている。演劇はこの脚本を主軸としてつくられており、脚本に沿って

役者や裏方が行動を起こすことで初めて演劇という芸術が成立する。脚本を脚本たらしめる要素というものは固陋に設定されているものではない為、世間には様々な形式、ジャンルの脚本が無数に存在している。この脚本を書く人間のことは作家と評することが一般的である。脚本にはその製作者や制作手順によって区分が異なり、大きく以下の 6 つに分類される［5］。

なお、本研究で用いる『プレゼンテーションのストーリー』と同義に捉える脚本は以下の区分の内(４)の「創作(そうさく)」の属性であり、発表者、もしくは発表者の属するグループにより作成されているものとする。

（１）「既成（きせい)」

①既成脚本をそのまま上演するもの。

・上演許可を得ていること。

②既成脚本をカットして上演するもの。

・上演脚本に著作権がある場合、カットした部分を示した脚本を著作権者に示し、許可を得た上で、あわせて上演許可を得ていること。

（２）「潤色（じゅんしょく)」

①既成脚本の一部に改変を加えて上演するもの。

・既成脚本に著作権がある場合、改変した部分を示した脚本を著作権者に示し、許可を得た上　で、あわせて上演許可を得ていること。

・潤色者名を明記すること。

（３）「構成（こうせい)」

①既成脚本をもとに、場面の組み換え等の大きな変更を行い、上演するもの。

・既成脚本に著作権がある場合、構成した部分を示した脚本を著作権者に示し、許可を得た上で、あわせて上演許可を得ていること。

・構成者名を明記すること。

（４）「創作（そうさく)」

①独自に創作して上演するもの。

②生徒創作の場合、推薦された時点で、執筆した生徒が上演校に在籍していること。

③顧問創作の場合、推薦された時点で、執筆した顧問が上演校に在職していること。

（５）「脚色（きゃくしょく)」

①小説、物語、絵本、その他脚本以外の著作物を原作として、脚本に書き改めて上演するもの。

・原作とした著作物を明記すること。

・原作にした著作物に著作権がある場合、必ず著作権者の許可を得ていること。

・他の著作物の「表現」を使用(転載)したり、改変して使用したりする場合は、必ず 他の著作物を明記し、その著作物に著作権がある場合は必ず著作権者の許可を得ること。

（６）「翻案（ほんあん）」

①他の演劇脚本をもとに、新たに脚本化したものを上演するもの。

・原作とした著作物を明記すること。

・原作にした著作物に著作権がある場合、必ず著作権者の許可を得ていること。

次に演出という役職の役割について触れていく。鴻上は『演技と演出のレッスン　魅力的な俳優になるために』の中で「俳優の演技に対して指示を出す存在を、映画では監督、テレビではディレクター、演劇では演出と呼びます。分かりやすく言えば、作家と俳優の間に入る人間です。」と述べている［6］。演劇での演出家というのは、脚本が伝えようとすることを俳優の肉体を通して舞台の上に具現化し、観客に正しく伝える作業を行う人間のことを指す。

演出という存在は脚本が示したいメッセージを役者や舞台装置を用いて観客に伝えることを目的とした役職で、その脚本を視覚的・聴覚的に楽しめる演劇という芸術に昇華させる為には演劇全体の方向性を決定する演出家が必要不可欠なのである。

第 3 章　プレゼンテーションへの演出技術の導入

3.1　プレゼンテーションの制作手順

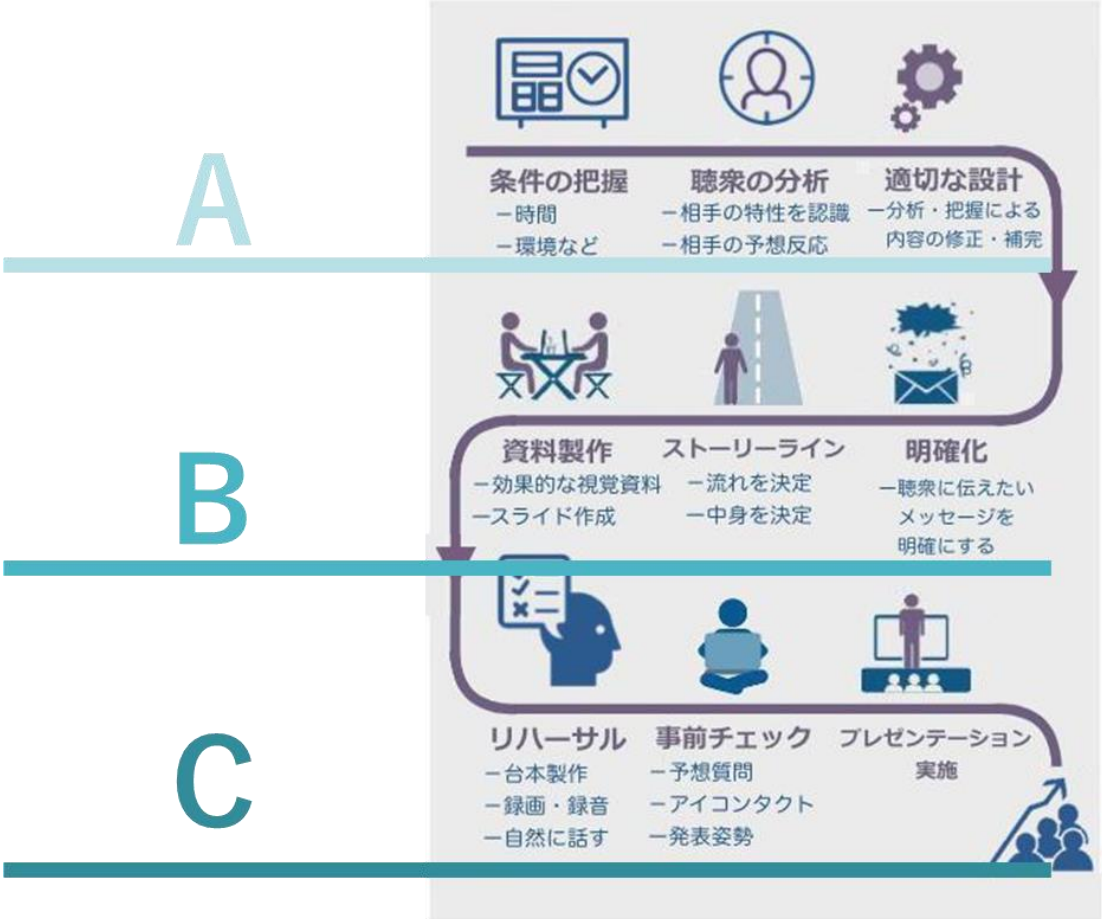

図 4　先行研究（金ヨンソ　プレゼンテーション製作法に関する学生向け学習方式 [2016]）で作成された学習ホームページ内のプレゼンテーションガイド[7]

2016 年湯浦研究室の金ヨンソがプレゼンテーション製作法に関する学生向け学習方式について研究を行った[7]。図 4 はその研究内で作成された学生向けプレゼンテーションガイドである。全体としては大まかに三部構成となっており、『A.状況の確認』、『B.プレゼンテーションの設計』、『C.プレゼンテーションの実施』という段階を更に九つの要素に分割している。

今回はこの金が作成したプレゼンテーションガイドを基にして演劇的要素を付加させる。図 4 は学生を対象としたガイドなので本研究の対象と合致し、また、このガイドで示され

ている『C.プレゼンテーションの実施』の段階ではリハーサルなどで発表者が声や体を用いることを手順に含めているので演劇的要素を追加しやすい為である。

3.2 演劇の制作手順

図 5　演劇の制作手順

上の図 5 は上演が決定した後に演劇を制作する際の制作手順を表したものになる。

上演する際にまず必要となるのは上演日と上演場所の確認、そして来場する観客の予想である。

会場の確認と観客の予想を基に次はその舞台で上演する脚本の制作を行う。

そして脚本が完成した後には演出が全体を通してこの演劇が伝えたいメッセージを脚本の中から読み取り、そのメッセージに沿った演出方法を考えていく。

その考案した演出に必要な役者を用意した後は役者の演技について演出家が指導していく。作家がその脚本に込めたであろうメッセージと演出家が上演する演劇の中で表現したい技術や行動、役者の演技と舞台装置の効果の全てを最も適したバランスで釣り合うようにすり合わせていく作業に近い。

メッセージの伝達の為に設計した演技を役者が舞台上で実施し、その出来についてまた演出から指導が入る、という繰り返しの作業を行い演劇のクオリティを向上させていく。

そして実際の舞台上でリハーサルを行い、照明装置や音響用のスピーカーなど舞台装置の準備を整える。

上演本番では劇団で決定したメッセージを観客に向けて表現する為に舞台の上で演劇を発表する。

3.3　プレゼンテーションの制作手順と演劇の制作手順の比較

プレゼンテーションと演劇の其々の制作手順に着目すると、相違点として最も大きいのは『演出の付与』、『演技の設計、実施』という項目の有無である。

プレゼンテーションと演劇はメッセージを伝えるという共通の目的を持った二つの異なる手段だ。だがその目的達成におけるメインのツールが演劇であれば『演技』、プレゼンテーションであれば『資料・スライド』のように区分されており、プレゼンテーションに感情的な演技やその演技指導を用いることは一般的には少ない。その為プレゼンテーションと演劇には其々ストーリーと脚本というメッセージを伝達する為の筋書きが共通して存在しているが、プレゼンテーションはストーリーを進行していくうえで発表者自身の表現技術に焦点を当てることが少ない。

3.4　プレゼンテーション制作過程への演劇的要素の導入

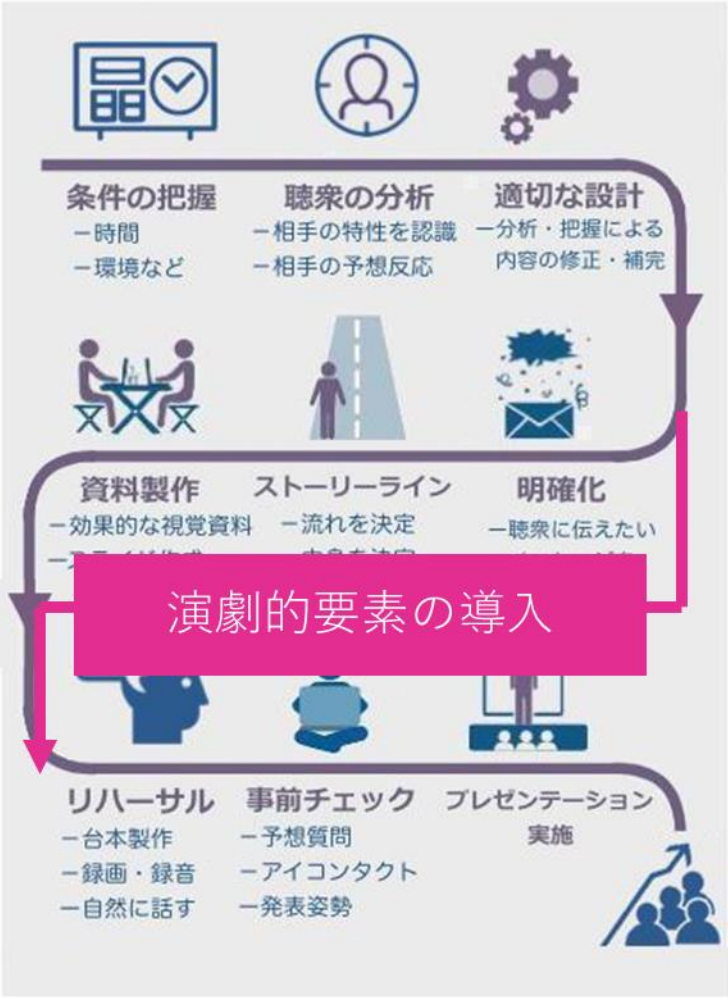

図 6　プレゼンテーションの制作過程への演劇的要素の導入

図 7　導入する演劇的要素

プレゼンテーションを発表する中で特に人々が注目するのは、発表内容の合理性と正しい論理展開である。具体的な内容について批評を論じる人はいてもその発表姿勢について細かいアドバイスを付与する存在は皆無に近い。

だがプレゼンテーションの目的であるメッセージ伝達の為には感情的な要素も必要不可欠だ。菅野は自身の著書『外資系コンサルのプレゼンテーション術―課題解決のための考え方＆伝え方』の中で「プレゼンテーションを成功させるためには、論理的に正しいだけでなく、聞き手の感情に訴求し、相手の決断を促すストーリーを考案する必要があります。」と述べており［8］、また井庭の著書『プレゼンテーション・パターン―想像を誘発する表現のヒント』にも「どんなによいストーリーでも、抑揚のない単調な表現では、聴き手の心をつかむことはできません。」と記述がある［9］。効果的なプレゼンテーションには論理的に優れているストーリーの制作のみではなく聴衆への感情的な影響を与えることも重要なのである。

演劇は制作の手順と発表を行う目的がプレゼンテーションと共通している点が多く、更に感情的表現による観客への共感誘導技術に特化している。そこで先程述べた相違点について着目し、ストーリーに沿って表現方法を変え効果的に見せる為の技術を促進させることを目的としたプレゼンテーション制作への演劇的要素の追加を提案する。

上の図６、図７は先程説明した金のプレゼンテーションガイドと、プレゼンテーションの制作に演劇的要素を導入した際に分岐する手順である。演劇的な手順は『B.プレゼンテーションの設計』と並行して行うものであり、その内容としてはまず初めにプレゼンテーション

のストーリー論理構成を感情的な変化部分に従って分割しその目的・効果の意図を伝達する。次にその分割した要素ごとに聴衆に感情的影響を与える為の表現用ガイドを与える。そしてそのガイドを基に演技の指導、再度発表の確認を行うことで聴衆に感情的なアプローチを可能としたプレゼンテーションの実現を目標とする。

3.5　演劇的プレゼンテーションの構成区分

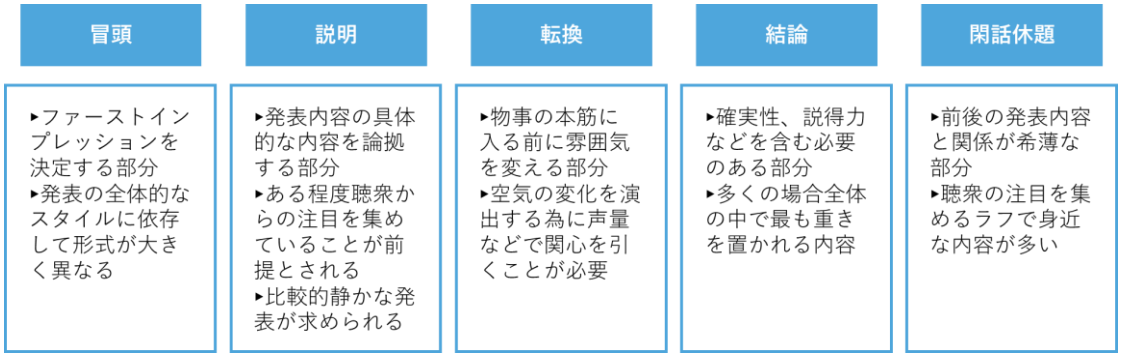

図 8　感情的なプレゼンテーションの演劇基本構造

プレゼンテーションへの演出導入にあたり、まず注目すべき点は演出をつける際に参考とする脚本の構成、つまりプレゼンテーションのストーリーラインである。ストーリーに沿って感情的な要素を付与していく為に、プレゼンテーションを構成する要素を感情的な変化が生じる部分で分割し、五つの要素に区分した。上の図 8 が分割した要素で構成したプレゼンテーションの演劇基本構造である。

冒頭部分ではその発表のイメージを決めるパートとなっており、その発表者やグループのスタイルによる雰囲気や形態の変化が最も大きく表れる内容となっている。

説明部分は全体の大部分を占めることが多く、発表内容の中で具体的な部分について論述を進めていくパートである。現実として変化するような事象が含まれていない場合は感情的になり過ぎず冷静さを示すように展開していくことが好ましい。

転換部分はそれまで話していた内容と異なる内容を話す際、それまでの空気を変えて注目を集めることを目的としたパートであり、聴衆に気づきをもたらす為に様々な発表に関わる要素を調整する必要がある。

結論部分はストーリー全体を総括しまとめていくパートで、多くの場合この部分に伝えたいメッセージが込められているパターンが多いので重要度が高い。その為発表の方法も工夫を求められる。

閑話休題部分は全てのプレゼンテーションに存在するものではないが、前後で発表していた話題からは比較的離れているような独立したパートを指す。これは発表内容との関係

性が低く、聴衆の気を惹くような簡易的で分かりやすい内容について軽く触れていることが多い。

3.6　本研究における演出の役割

演劇においての演出は、論理構造を基としてその要素がどのような意図を持つのかという方向性を考察、決定する。次にその場面に適した感情的要素を加え、演技の方法を役者に指導する。演出とは作品が持つイメージの構築、それに合わせた各場面への表現技法を付与していく役職である。
本研究ではそのような演出の役割をプレゼンテーションの制作に適切な形になるよう変化させるため、指導する感情的要素をプレゼンテーションの中で重要とされる『声』、『表情』、『動き』、『スライド』の四つに限定する。そして先述した感情的要素を基にしたプレゼンテーションの構成要素に従って発表の方法を指導するという役割をプレゼンテーションにおける演出とする。

3.7　プレゼンテーションでの感情的要素とその指標

	声	表情	動き	スライド
1	▸最低限聞こえる声量 ▸低い声色 ▸滑舌にあまり重きを置いていない	▸無表情 ▸視線の動きが少ない、スライドや手元への視線が多い	▸その場に止まった状態 ▸手の動きなども特に無く立ち尽くした状態	▸枚数が少ない ▸１枚の与えるインパクトが大きい ▸観客側に伝えるメッセージが簡潔
3	▸全員に普通に聞こえる程度の声量 ▸通常の高さ ▸流さない程度の速さ	▸一つの表情が豊かだが変化はそこまでない ▸視線が観客側に多く動く	▸発表している場所から少し移動したりしている ▸身振り手振りが話している個所によっては見られる	▸数枚使用して説明している ▸１枚ごとの繋がりが明白である ▸１枚ごとの情報量が多すぎない
5	▸全員の注目を集める程度の声量 ▸通常より少し高い声色 ▸少しゆっくりとした速度	▸話す部分によって表情が大きく変化する ▸視線の動きが多い(観客側～スライドなど)	▸発表している部分から大きく移動したりしている ▸身振り手振りの範囲が大きい、頻度が高い	▸多数の枚数で説明している ▸説明が不要なスライドの存在 ▸スライド内の情報が多い

表 1　プレゼンテーションにおける感情的要素と五段階指標

プレゼンテーションへの演出をつけていくにあたり場面毎に変化する四つの感情的要素とその具体的な変化内容を表 1 に記した。各要素の変化単位は五段階の指標によって設定

するものとする。

声は声量、滑舌、高低という点において注目し、その大きさや速度の変化で表現を変える。

表情は視線の動き、感情の変化という点に注目し、その大きさや頻度の変化で表現を変える。

動きは観客側の視線誘導という点に注目し、その対象や頻度、大きさの変化で表現を変える。

スライドとのバランスはスライドと口頭説明での情報量に注目し、その比率の変化で表現を変える。

	冒頭	説明	転換	結論	閑話休題
声		3	4	5	2
表情		2	3	2	4
動き		1	3	1	4
スライド		4	2	1	1

表 2　演劇基本構造単位の理想的な表現技法の指標

先程説明したプレゼンテーションの構成要素に合致した表現技法の指標を当てはめたものが表 2 になる。

理論的なデータが主軸となる説明部分はスライドでの説明を重視し、関心を惹く必要のある転換部分では表情の変化を求める。

全体の主張である結論部分には、メッセージを伝達する際に聴衆から注目を集める方法として声の重要性を示唆する。

発表中の小休止となる閑話休題部分では表情や動きで和やかな雰囲気の演出をさせるような指標になっている。

ただし冒頭の部分は各発表団体によってプレゼンテーションの形式や雰囲気が異なる為、一概に一つの指標を決めることはできないと判断した。

第 4 章　大学生を対象とした演出的プレゼンテーション講座の実施

4.1　対象者とプレゼンテーションの内容

講座の受講者は静岡大学情報学部行動情報学科の 3 年生で過去に静岡大学ビジネスコンテストに参加したグループのプレゼンテーター二人である。講座を受講するにあたり二人には事前に 2019 年 11 月にビジネスコンテスト内で発表していたスライドを用意してもらい、その発表を基にプレゼンテーションのスキルアップを図ることを目的として本講座に参加してもらった。

本論文の中では二人の対象者をそれぞれ A、B と称する。

4.2　記入用ワークシートの準備

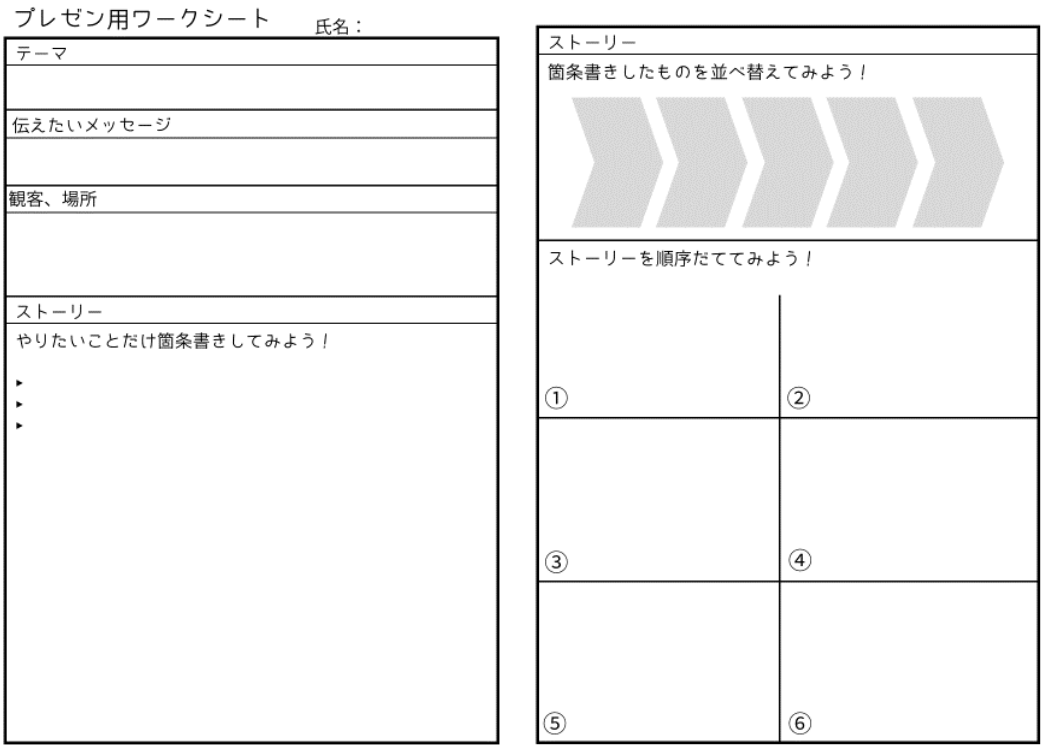

図 9　記入用ワークシート

プレゼンテーションの作成・完成に至る際どのようなメッセージを決定し、どのような流れでストーリーを展開していく予定だったのかを調査する為のワークシートを作成した。上の図 9 は講座内で対象者に配布したワークシートである。

ワークシートの構成要素としては、まず左側のシートでは初めに発表する目的を考えさせる為にプレゼンテーションのテーマとメッセージについて記入させる。

次にプレゼンテーションを行う際に想定される発表場所や時間帯などの状況、発表を聞いている聴衆の予想をさせる。

次に実施するプレゼンテーションの中で自分達が行いたいこと、聴衆に与えたい印象や効果などを箇条書きで記入させる。

次は右側のシートに移り、先程箇条書きしたものを行いたい順番に並べ替えさせる。

そして最後に並べ替えた要素に従って全体のストーリーを順番に制作させていく。

4.3　実際の講座内容

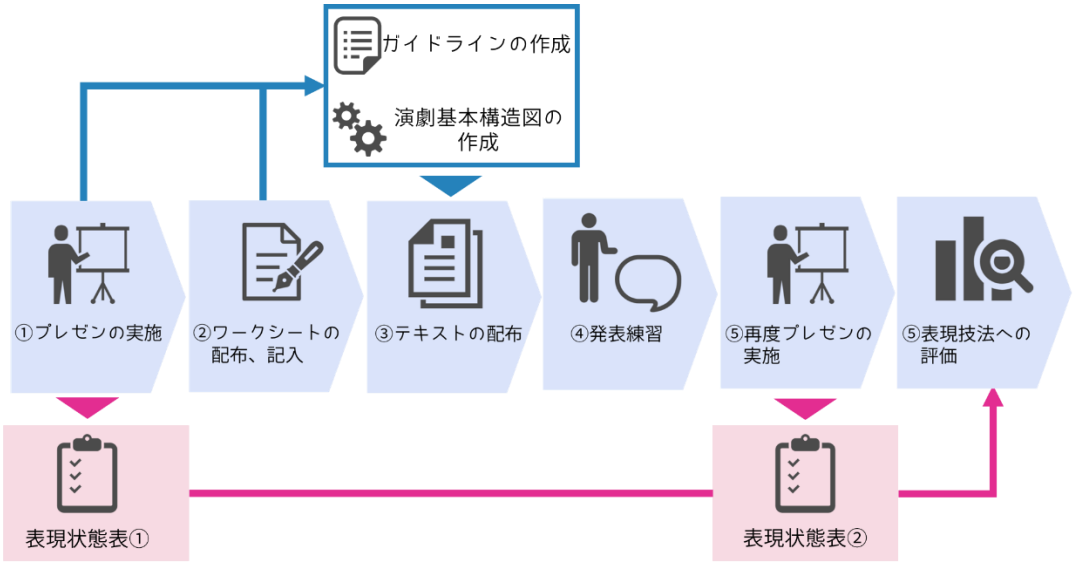

図 10　実施した講座の内容と手順

実際に行った講座の内容と手順(図 10)について以下で説明する。

まず講座による発表の変化を観測する為以前対象者が行っていたプレゼンテーションを実際に発表してもらい、その段階で改善したい点をチェックする。そしてスライド別に現在の感情表現の程度を記載した表現状態表を作成する。この表現状態表は 3 章で示した指標を用いて数値づけしている。

次に事前準備で作成したワークシートを記入してもらい、対象者がプレゼンテーション全体の構成と各スライドでの感情的効果をどれだけ理解できているか確認する。

また第一回の発表と記入されたワークシートを基に、二つの資料を作成する。一つはスライド別に理想的な感情表現の指標を示したガイドライン、もう一つは 3 章で述べた図 8 に従って全体の演劇基本構造を区分したストーリーの演劇基本構造図である。作成した資料に関しては後ほど別途に説明する。

次に先程作成した二つの資料を対象者に配布する。この手順は図 10 内で青の矢印が示している部分である。

次にガイドラインについて簡単な説明を行い、演劇基本構造の確認を行う。その工程と配布資料を参考にプレゼンテーションを構成している要素の見直し、発表の練習を行う。

次に再度プレゼンテーションを実施し、初めに実施したプレゼンテーションとの変化点を確認する。そして第一回と同様に発表中で見られた感情表現の状態表を作成する。

最後に第一回と第二回で作成した表現状態表の比較を行い、対象者の表現技法に現れた変化の確認を行い、評価する。この手順は図 10 内で赤の矢印が示している部分である。

4.4　作成したガイドラインと演劇基本構造図

	属性	声	表情	動き	スライド
1	タイトル、自分たちのサービスの概要	4	4	2	1
2	現在の問題点 …サービス概要の反復	3	3	2	3
3	問題解決法として提案したシステム …最初の反復	4	4	2	1
4	現状での困難性 …提案したサービスによる可能性の向上	3	2	3	3
5	サービスの大まかな内容説明	3	2	2	1
6	ビジネスモデルの紹介 サービスのより詳細な説明	2	1	1	4
7	図に則っての説明 …順序、説明の順番が重要	2	1	1	4
8	7に沿った実用例 …7よりも若干ラフなパート	2	2	2	3

	属性	声	表情	動き	スライド
9	冒頭と同じ属性 8との関係性低め …転換のパート	4	4	2	1
10	現在の問題点 …サービス概要の反復	3	3	2	3
11	現状の企業 …事前説明の部分、差が出る前	2	1	1	2
12	サービス導入後の図 …サービスの魅力、役柄を伝える、差を出す	3	3	2	3
13	サービス導入後の図 …サービスの魅力、役柄を伝える、差を出す	3	3	2	3
14	ターゲットの説明 …説明のジャンルが変わる、小さめの転換	4	2	2	2
15	問題点、解決策 …多少ラフに流すと引っ掛かりが無い	2	2	1	2
16	将来的展望 …未来の話、可能性を感じるパート	4	4	2	1

	属性	声	表情	動き	スライド
17	収益の仕組み …サービスの説明の1つ	3	2	1	2

表 3　対象者 A に配布した理想的プレゼンテーションのガイドライン

	属性	声	表情	動き	スライド
1	タイトル、前回との変更点 …冒頭である程度の注目を集める必要あり	4	4	2	1
2	ターゲット層の説明 …1との繋がりを意識	3	2	2	2
3	ターゲット層へのヒアリング結果 …サービス提案の理由	3	2	2	3
4	自サービスの強み …一番強調したいところ聞かせることを意識	5	3	3	1
5	実際の飲み会の流れ …各項目の中で自分達が注目した部分を分からせる	2	2	4	3
6	サービス内容の大まかな説明 …説明の中でも特に伝えたい部分、中核	4	2	2	3
7	お店選びに関しての説明 …重要な単語を聞かせる	3	2	1	2
8	コース提案に関するヒアリング結果 …機能提案の理由	3	2	2	3

	属性	声	表情	動き	スライド
9	お店選びに関するモデル図 …話している順番、場所が分かるように	2	1	3	3
10	お店選びに関しての2次会追加機能 …強みなのでアピール！	3	3	2	2
11	空席状況に関するヒアリング結果 …並列、情報の差を意識	3	2	2	3
12	追加機能のモデル図 …話している順番、場所が分かるように	2	1	3	3
13	リマインドに関する説明 …7と同じ属性	3	2	1	2
14	自サービスの強み …結論としての属性を付与強みのおさらい、再確認	5	3	3	1

表 4　対象者 B に配布した理想的プレゼンテーションのガイドライン

講座内で感情表現技法の指標を説明する際に参考とするガイドラインの作成を行う。上の表 3、4 は対象者 A、B にそれぞれ配布した理想的な指標を示したガイドラインである。

第一回目の発表で二人が行ったプレゼンテーションの内容を、3 章で説明した演劇基本構造に従ってスライド単位で分類していく。またその際、スライドが持つ感情的な効果・目的を属性として追加で記載した。そして各スライドの属性に最も適していると思われる表現技法の指標を、3 章で述べた表 1 の表現指標に則って数値を当てはめていく。

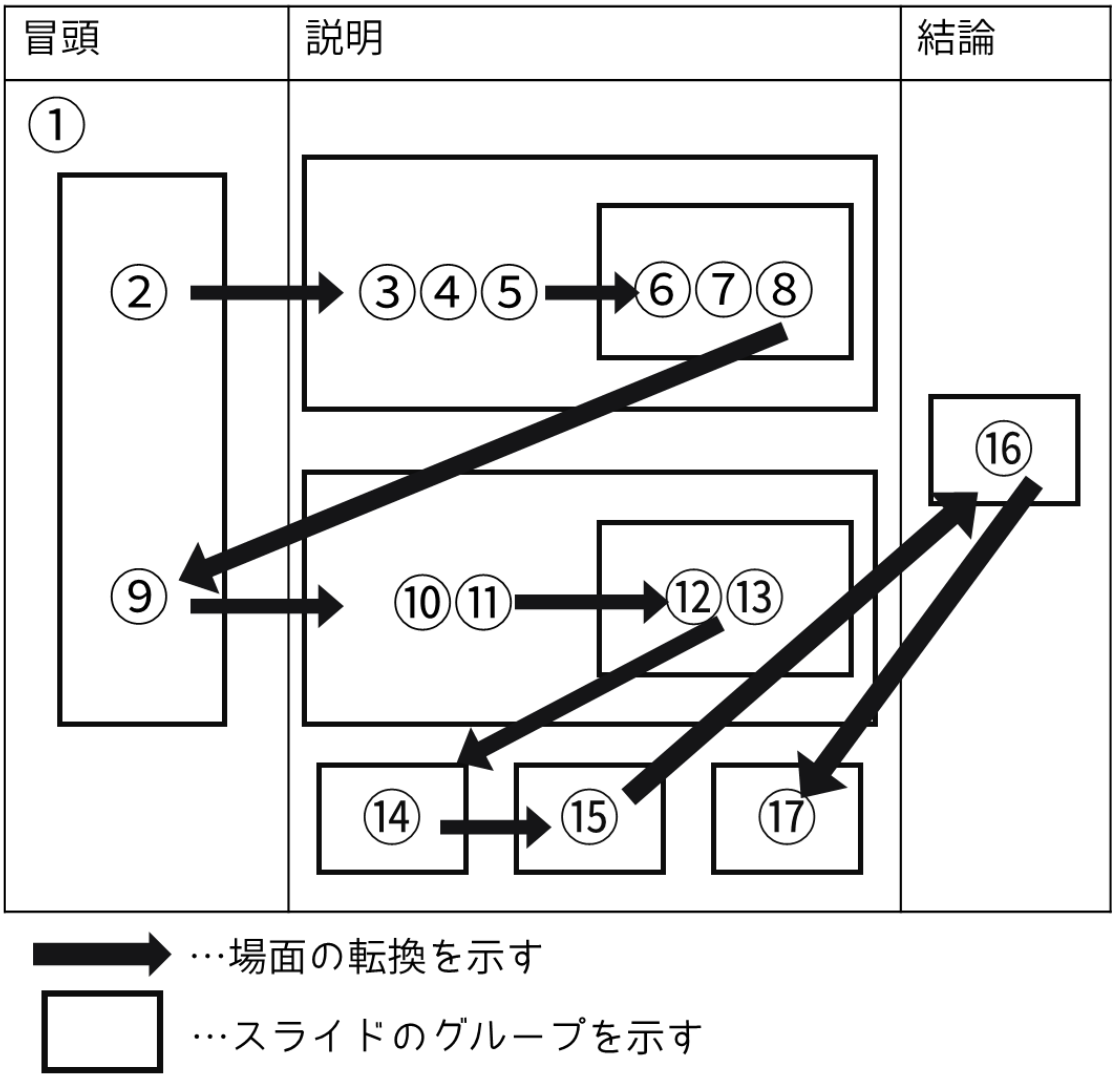

図 11　対象者 A の第一回演劇基本構造図

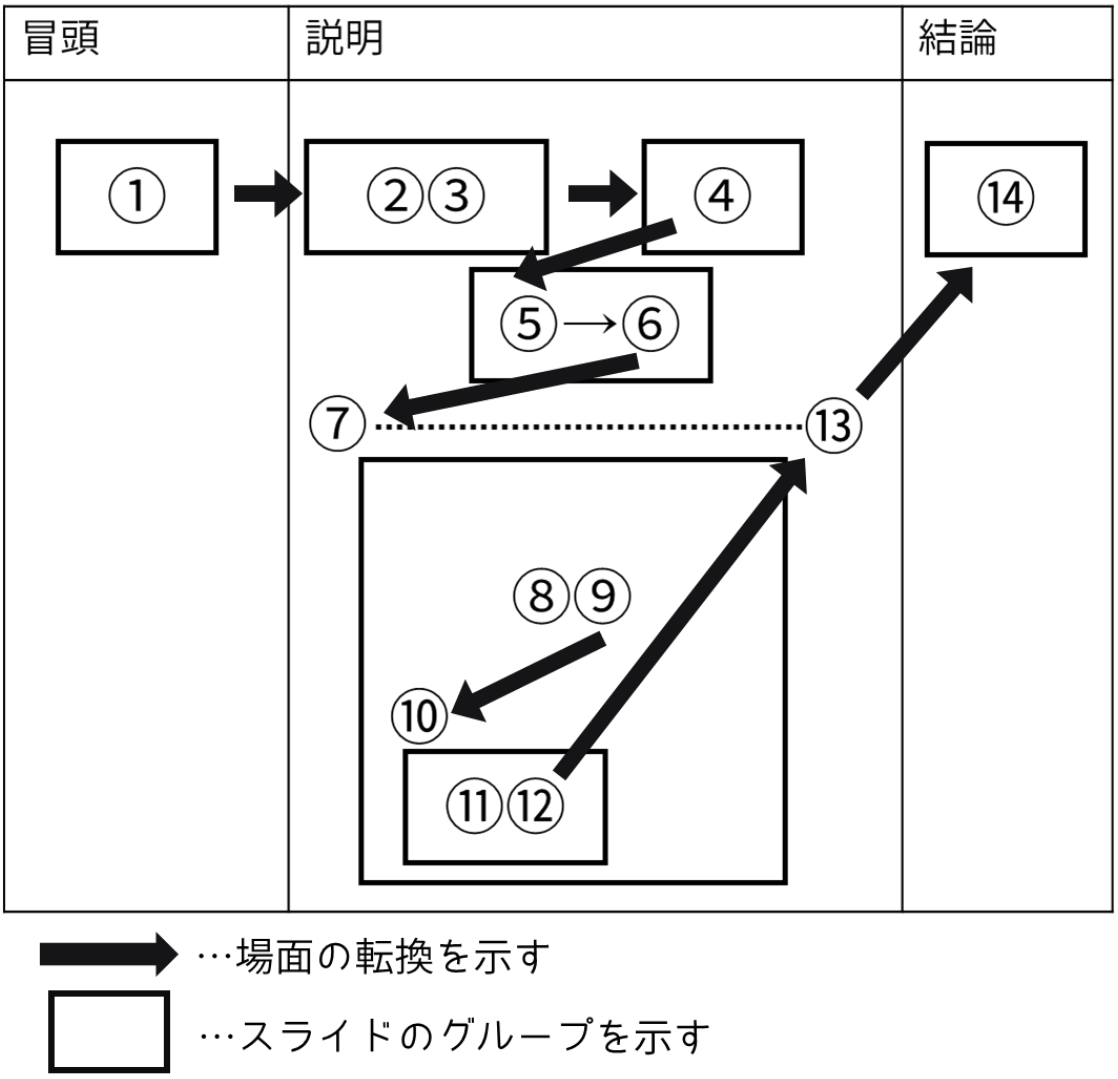

図 12　対象者 B の第一回演劇基本構造図

またガイドラインと一緒に配布する演劇基本構造図を作成する。演劇基本構造図とは、対象者の発表したストーリーラインを 3 章の図 8 で説明したプレゼンテーションの演劇基本構構造に沿ってに分類したものである。図中の矢印は場面が転換する際の動き、図中の枠は内容によってグループ化されたスライドの集合を示している。

上の図 11、12 は対象者 A、B が第一回で発表したプレゼンテーションの演劇基本構成を図にしたものである。

対象者 A の構成内容は 2 ページ目と 9 ページ目にそれぞれ冒頭となる内容があり、その後のページは冒頭に則って説明を行っていく流れとなっている。対象者 A の初めの演劇基本構成では結論である 16 ページが説明の要素を持つ 17 ページの前にあり、それに伴い転換の様子が大きくなっている。

対象者 B の構成としては 7 ページと 13 ページが同等の情報として並んでいる。図 12 の

下部にある枠は 7 ページの持つ属性に 8 ～12 ページの持つ属性が内包されている様子を表しており、7 ページと 13 ページを繋ぐ点線は二つのページが同じ属性を持つことを示している。7 ページと 13 ページの内部を確認すると同等の情報を説明するにあたり、7 ページの持つ属性は計 6 枚、13 ページの持つ属性は計 1 枚を使用している。以上の点から 7 ページと 13 ページの情報量を比較すると、7 ページの持つ情報量の方が濃い密度のものだと推測できる。

対象者 B の演劇基本構造としては、説明した先に情報の密度が濃い 7 ページの構造を説明し、その後に密度の薄い 13 ページの説明を行っている点が特徴的である。

4.5　講座によるプレゼンテーションスキルの変化点

最初の発表後に、各対象者に対応したガイドラインと演劇基本構造図の配布を行った。

その後、配布した理想的な指標のガイドラインについて指標が示す数値の具体例を説明する。

またガイドラインと一緒に配布した演劇基本構造図が伝達したいメッセージに沿っているものかを対象者に確認する。

ガイドラインの説明と演劇基本構造図の確認終了後、対象者達には発表練習やスライドの見直しをしてもらい、再度同じ資料を用いてプレゼンテーションを行ってもらった。

	要素区分	声	表情	動き	スライド
1	冒頭	2	2	1	1
2	冒頭→説明への転換	1	1	1	4
3	説明	2	2	2	1
4	説明	2	2	1	3
5	説明→他の説明への転換	1	1	2	3
6	説明	2	1	3	4
7	説明	1	1	1	4
8	説明	2	2	1	3

	要素区分	声	表情	動き	スライド
9	冒頭→説明への転換	2	1	1	3
10	説明	1	1	1	3
11	説明→他の説明への転換	2	1	1	4
12	説明	2	1	2	4
13	説明→他の説明への転換	1	1	1	4
14	説明→他の説明への転換	2	1	2	3
15	説明→結論への転換	2	1	2	3
16	結論→説明への転換	1	1	2	3

	属性	声	表情	動き	スライド
17	結論	3	2	1	2

表 5　対象者 A の第一プレゼンテーション表現状態表

	要素の区分	声	表情	動き	スライド
1	冒頭→説明への転換	2	2	1	1
2	説明	2	1	1	3
3	説明→他の説明への転換	3	2	2	3
4	説明→他の説明への転換	3	3	1	1
5	説明	2	1	2	4
6	説明→他の説明への転換	2	2	2	3
7	説明	2	3	2	3
8	説明	3	2	2	3

	要素の区分	声	表情	動き	スライド
9	説明→他の説明への転換	3	2	2	4
10	説明	2	2	3	3
11	説明	2	1	2	3
12	説明→他の説明への転換	2	1	2	3
13	説明→結論への転換	2	2	1	3
14	結論	3	1	1	1

表 6　対象者 B の第一プレゼンテーション表現状態表

上の表 5、6 は対象者 A、B が初めに行った第一回プレゼンテーションでの表現状態を各スライドに分割し五段階指標にて表したものである。各表現状態表には演劇基本構造図での区分と転換の様子を記載している。各数値は表 2 を参考にして記入したものである。

対象者 A のスライドは全 17 枚、対象者 B は全 14 枚の構成であった。

下の表 7、8 は再度実施した際の表現状態を五段階指標で表したものである。数字の色が異なる部分は最初の発表と比較して表現の数値が大きくなったものを表している。また本実験の中ではスライドの内容を変更することを行わなかった為、四つの指標の内スライドの要素は考慮しないものとする。

	要素区分	声	表情	動き	スライド
1	冒頭	3	4	2	1
2	冒頭→説明への転換	3	3	2	4
3	説明	4	2	1	1
4	説明	3	3	2	1
5	説明→他の説明への転換	2	2	2	4
6	説明	3	3	3	3
7	説明	2	2	1	4
8	説明	3	3	2	3

	要素区分	声	表情	動き	スライド
9	冒頭→説明への転換	3	3	1	3
10	説明	3	2	2	3
11	説明→他の説明への転換	2	2	1	4
12	説明	2	1	2	4
13	説明→他の説明への転換	2	1	2	4
14	説明→他の説明への転換	3	3	3	3
15	説明→他の説明への転換	3	2	2	3
16	説明→結論への転換	2	2	2	3

	要素の区分	声	表情	動き	スライド
17	結論	3	3	2	3

表 7　対象者 A の第二プレゼンテーション表現状態表

	要素の区分	声	表情	動き	スライド
1	冒頭→説明への転換	2	2	1	1
2	説明	3	2	3	2
3	説明→他の説明への転換	3	2	2	3
4	説明→他の説明への転換	3	3	3	1
5	説明	2	2	3	3
6	説明→他の説明への転換	3	3	3	3
7	説明→他の説明への転換	3	2	2	2
8	説明	3	2	2	3

	要素の区分	声	表情	動き	スライド
9	説明	2	2	3	3
10	説明→他の説明への転換	3	2	2	2
11	説明	3	2	2	3
12	説明	3	3	3	3
13	説明→結論への転換	2	3	3	2
14	結論	4	3	2	1

表 8　対象者 B の第二プレゼンテーション表現状態表

4.6　実施結果の分析、考察

4.6.1　講座による表現技法の変化

声	表情	動き
8	8	3

改善した点	変更されてない点
*表情(聴衆への視線、笑顔)の増加 *声量の平均的増加 *腕の動きの増加	*全体のバランス、メリハリ *動きのバラエティ

表 9　対象者 A の表現に対する評価

対象者 A、B への講座終了後、第一回と第二回の発表を受けて作成した表現状態表から講座前と講座後での表現技法の比較と評価を行う。

上の表 9 は対象者 A が講座を受講する前後で表現数値が増えた点の要素別合計と、講座を通して改善されたと思われる点、変更が見られなかった点を評価したものである。表現数値は表 2 を参考として記載している。

対象者 A は『声』と『表情』の要素で数値の上昇が多く見られ、講座の前後で『声』と『表現』の改善した点が特に目立って観測された。

『表情』は、冒頭である 1 ページ目では初めは下を向きがちであったが、講座後の発表では前を向いている時間が長く、また口角も上がっている。

『声』は全体を通して声量の増加、語頭の発音への意識が見られた。

『動き』の中でも、説明と他の説明への転換の要素を含む 14 ページでは腕で画面を示してどの部分を現在話しているか説明する為の動作が増えるなど、『動き』の項目の中にも変化を確認することができた。

講座を通して変化が見られなかった点としては、『動き』として動く際の動作のバラエティが増えていない点が挙げられる。腕でスライドを表示している画面を指すという動作は数回観測することができたが、スライドへの注目を集めるための動作のみで自らに注目を集めるための動きを確認することはできなかった。

また全体的に数値の上昇は見られたが、スライド別で表現の違いを観測する部分は少なかった。発表している内容とその効果に沿って各要素に適した表現技法にするという本講座の目的達成には至らなかった。

声	表情	動き
8	8	8

改善した点	変更されてない点
*動きのバラエティ、頻度の増加 *声量の平均的増加	*全体のバランス、メリハリ *表情が一定

表 10　対象者 B の表現に対する評価

次に対象者 B の改善した点・変更されていない点について述べる。上の表 10 はその概要と講座前後で表現技法の数値上昇を確認した合計を記載したものである。

まず対象者 B では『声』、『表情』、『動き』において同数の数値の上昇が見られた。

『声』は全体を通して声量の増加、滑舌の意識を感じることができた。

『表情』は 11 ページでの先程言った説明を繰り返す部分で笑いを入れることで聴衆の気を惹くことが可能となっていた。

『動き』ではスライド中に多くのオブジェクトが存在する際その移動経路を腕で示していた。また言葉で説明しながらオブジェクトを疑似的に手で表現して動作を表現する等の豊かな表現を観測することができた。

講座内で変化が見られなかった点としては、『表情』にあまり差分が生じなかった点がある。全体的に視線が聴衆の方を向くようになっており数値の上昇には繋がったが、対象者 A のような口角の上がる部分は比較的少なく、全ての発表部分に同じ印象を持ってしまう要因となった。

そして対象者 A と同様に、全体での表現数値の上昇自体は多く見られたが、冒頭から結論まで一定の調子で発表していることが多く、要素に従った表現技法の変化の観測は殆どなかった。

4.6.2　講座による演劇基本構成の変化

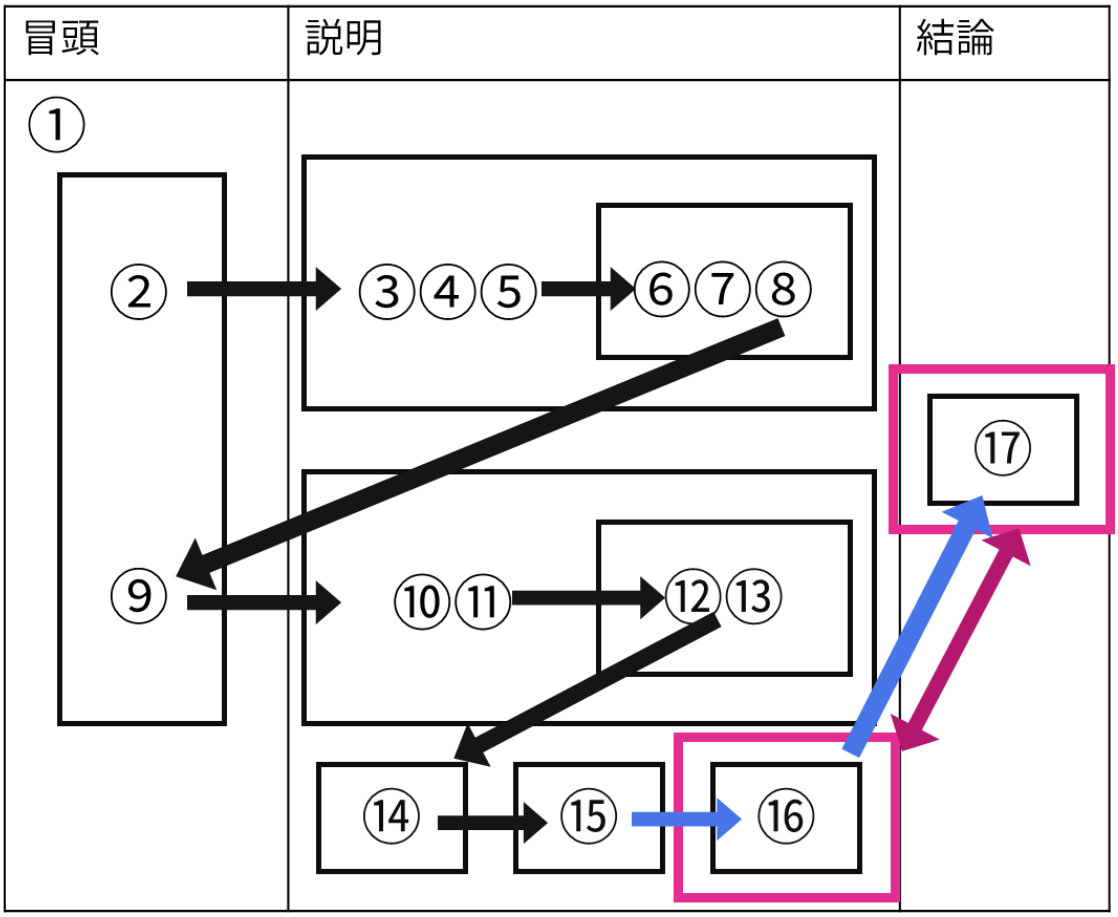

図 13　対象者 A の第二プレゼンテーション演劇基本構造図

上の図 13 は対象者 A が第二回で発表したプレゼンテーションを図 11 同様に演劇基本構成に当てはめたものである。青の矢印は先程の図と変更された転換の様子を示したもの、赤の矢印と枠線は第一回と比較して変更したスライドの動きを示したものである。

第一回では先に結論の要素を持つスライドを示し、その後に独立した説明の要素を表示していた。

第二回では結論である 16 ページと説明である 17 ページが交換され、結論が最終のページである 17 ページに移動した。この変更によって大きい転換が一つ消滅し、小さい転換に変更されたことが分かる。

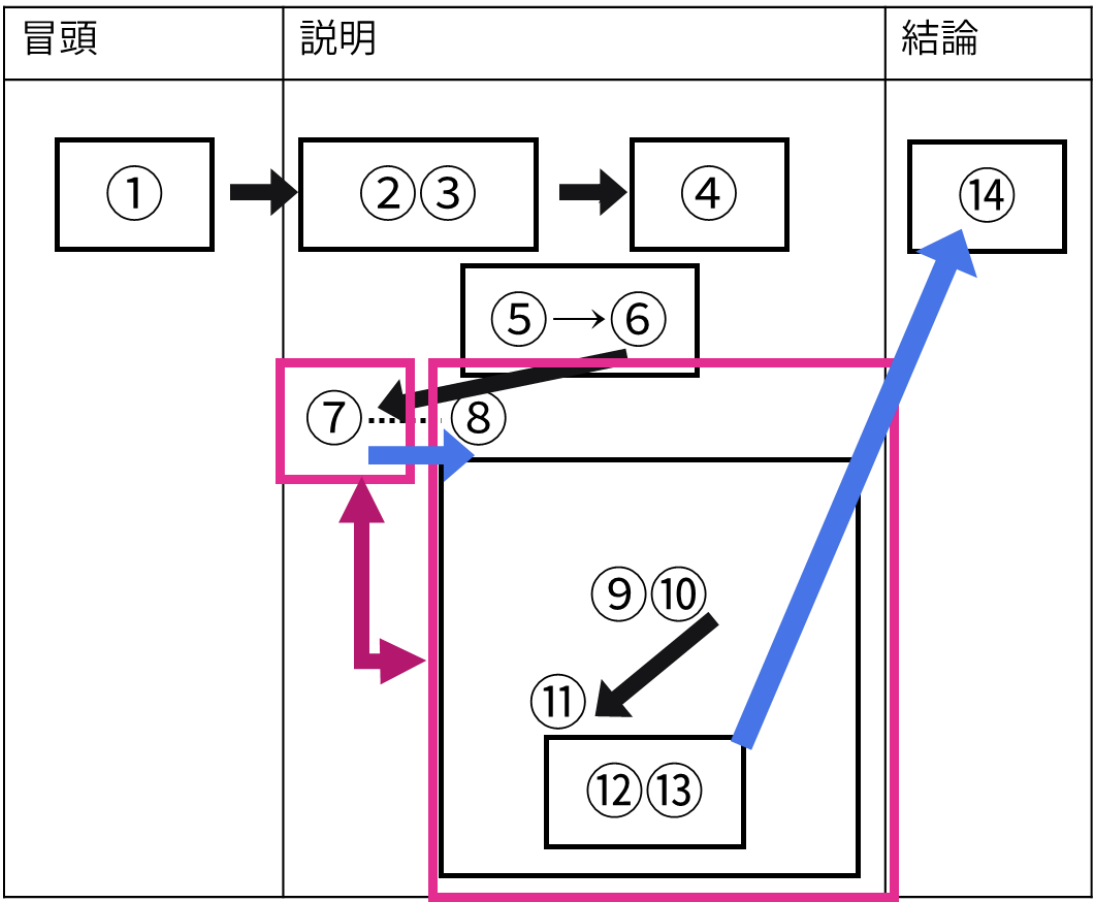

図 14　対象者 B の第二プレゼンテーション演劇基本構成図

次に対象者 B が第二回で行ったプレゼンテーションのストーリーラインを演劇基本構造図(図 14)で表す。

第一回では 7 ページと 13 ページが同等の情報価値を持っており、情報密度の濃い 7 ページから説明が行われていた。

第二回では 7 ページと 13 ページの説明順序が入れ替わり、密度の薄い 13 ページが先に説明され、説明の属性を持つスライドの中で最も情報密度が濃い部分が最後に発表される要素になった。この移動によって中程度の大きさを持つ転換が二つ合成され、説明の属性から結論の属性へと移動する際の大きな転換と変化した。

対象者二人に講座を受けてもらった結果、A、B の二人からプレゼンテーションの改善点としてスライドの構成が生じた。本研究においてプレゼンテーションのストーリーは演劇における脚本の役割を担っているが、その脚本部分に変更が生じているということになる。つまり感情的表現技法の指導を効果的に行う為にはまず対象の発表内容に確立した構成が存在している必要があることが判明した。

第 5 章　効果的なスキット作成に向けたワークシートの配布とフィードバック

5.1　対象者とスキットの内容

4 章で実施した実験で、プレゼンテーションに演出技術を導入するにはまず構成が安定したストーリーの制作が必要であることが分かった。そこで発表を行う際の確立されたストーリー構成を学習させる為、スキットを行う学生を対象としてストーリー作成に向けたワークシートの配布、ワークシートへのフィードバックを行った。

今回のスキット作成は静岡大学情報学部行動情報学科が受講している知的情報システム開発という授業の 2019 年度のクラス内で 3〜5 名の人数で編成された計 5 グループを対象として行われた。今回のスキットは各班が発表したい機能についてのプロトタイプを用意し、そのプロトタイプを実演する様子を寸劇で再現、説明する為の内容となっている。

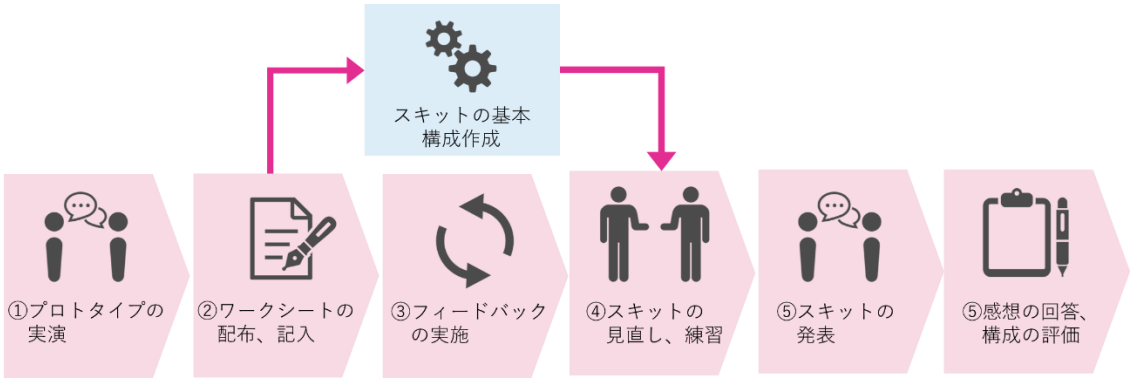

図 15　スキットの制作手順

上の図 15 は今回実施するスキット作成の手順を示したものである。

始めに各班がプロトタイプの作成を行い、そのプロトタイプを基盤にしたストーリー構成の提案、実演を行う。

次にその実演を踏まえて事前に準備した論理構成に関するワークシートを配布し、各班に記入してもらう。そして記入後のワークシートを回収し、それを基にスキットの基本構成を作成する。この手順は図 15 内で左側の赤の矢印が示している部分である。

次に回収したワークシートに対し、論理構成や各構成要素の目的・効果を意識させる為のフィードバックを作成し、各班に再度配布する。

また、同時に各班に先程作成したスキットの基本構成を記載したテキストも配布する。各

班にはその基本構成と班ごとに与えられたフィードバックを参考にスキットの見直しを行ってもらい、発表練習をしてもらう。

次に各班に実際にスキットの発表を行ってもらい、確認したワークシートと論理構成について比較を行う。

最後にスキット参加者全員に対し、スキットに関する感想、評価を回答してもらう。その回答を基に今回のワークシートとフィードバックが対象者達にどのような影響を与えたか調査する。

5.2　記入用ワークシートの作成、配布

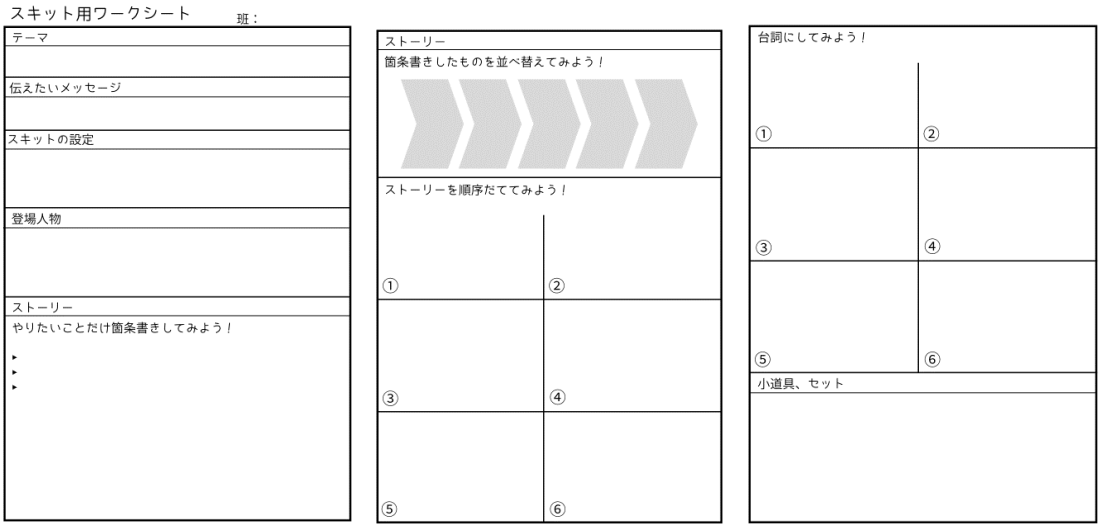

図 16　スキット作成ワークシート

まずスキットを発表する際にどのようなメッセージを伝達し、どのような流れでストーリーを展開していく予定なのかを調査する為のワークシートを作成した(図 16)。

ワークシートの構成要素としては、まず左側のシートでは初めに発表する目的を考えさせる為にスキットのテーマとメッセージについて記入させる。

次にスキットを行う際に想定される発表場所や時間帯などの状況、発表を聞いている聴衆の予想をさせる。

次に実施するスキットの中で自分達が行いたいこと、聴衆に与えたい印象や効果などを箇条書きで記入させる。

次は中央のシートに移り、先程箇条書きしたものを行いたい順番に並べ替えさせ、並べ替えた要素に従って全体のストーリーを順番に制作させていく。

次は右側のシートに移り、中央のシートで作成したストーリーを実際の脚本として利用

できるように各場面で話す台詞を考えさせる。

最後にスキット内で使用する小道具やセット、音響素材等があった場合はその内容を確認させる。

スキットの作成を開始した対象者達に各班 1 部ずつワークシートを配布し、班内で行う予定であるスキットのストーリーを作成してもらう。記入したワークシートは回収し、次週にストーリー構成の部分で改善すべき点を記入したフィードバックを配布した。

5.3　スキットの基本構成

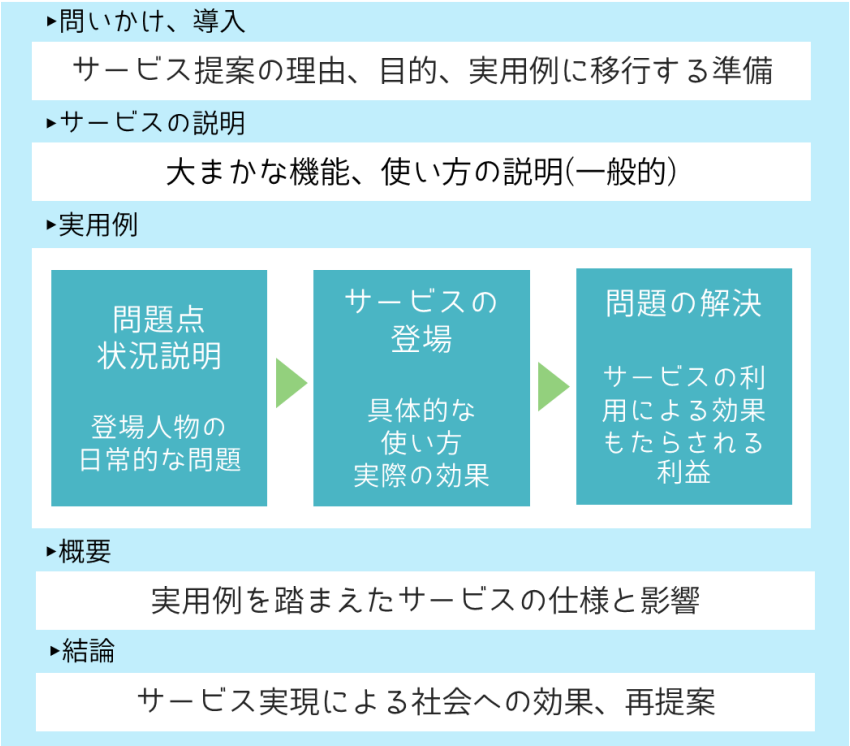

図 17　スキットの基本構成

上の図 17 は各班がワークシートに記入したストーリーを基に作成したスキットにおける基本構成になる。

まず導入としてサービスを提案した理由、目的を聴衆に理解させてからサービスの説明にストーリーを促していく。

次にサービスの大まかな概要を説明し、一般的な使用方法の示唆を行う。

そして寸劇の中で、現在抱えている問題点を今回提案するサービスにより解決するとい

う流れを実際に使用している実用例で示す。

実用例を見せた後にはその結果を踏まえてサービスの仕様やサービスがもたらす影響について汎用的な意見を述べる。

最後に結論としてサービスの実現による利益について説明し、再度サービスの提案を行う。

5.4　ワークシートを基にした論理構成へのフィードバック

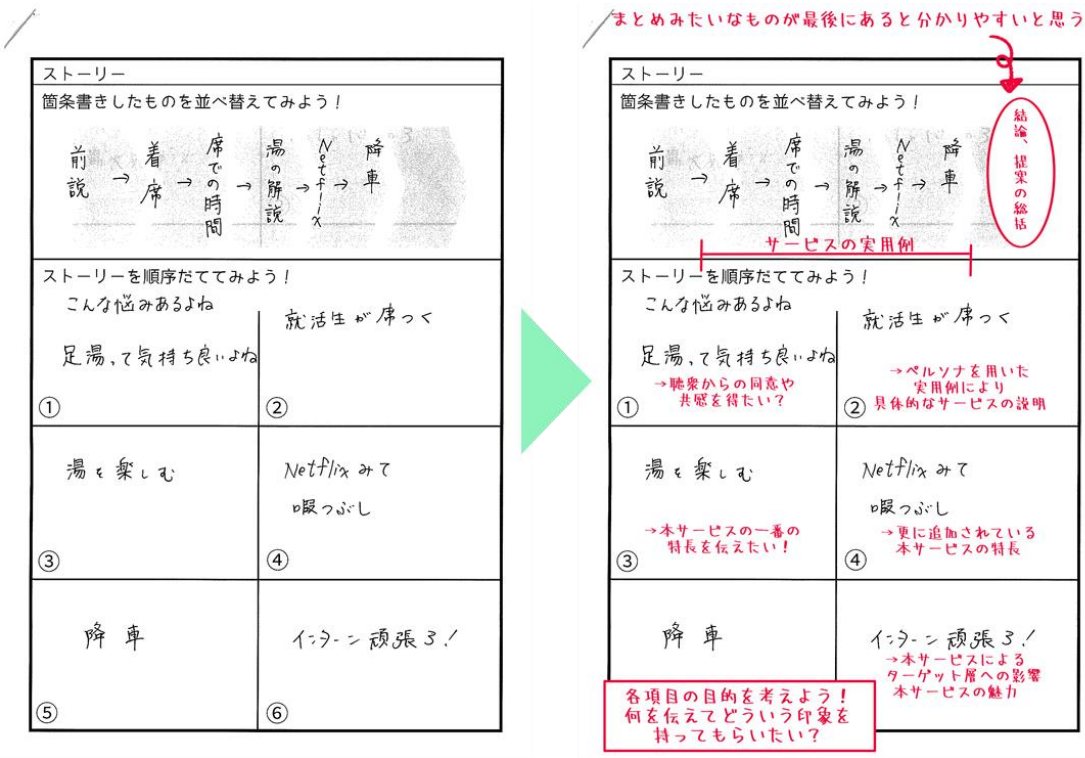

図 18　A グループワークシートの一部とそのフィードバック

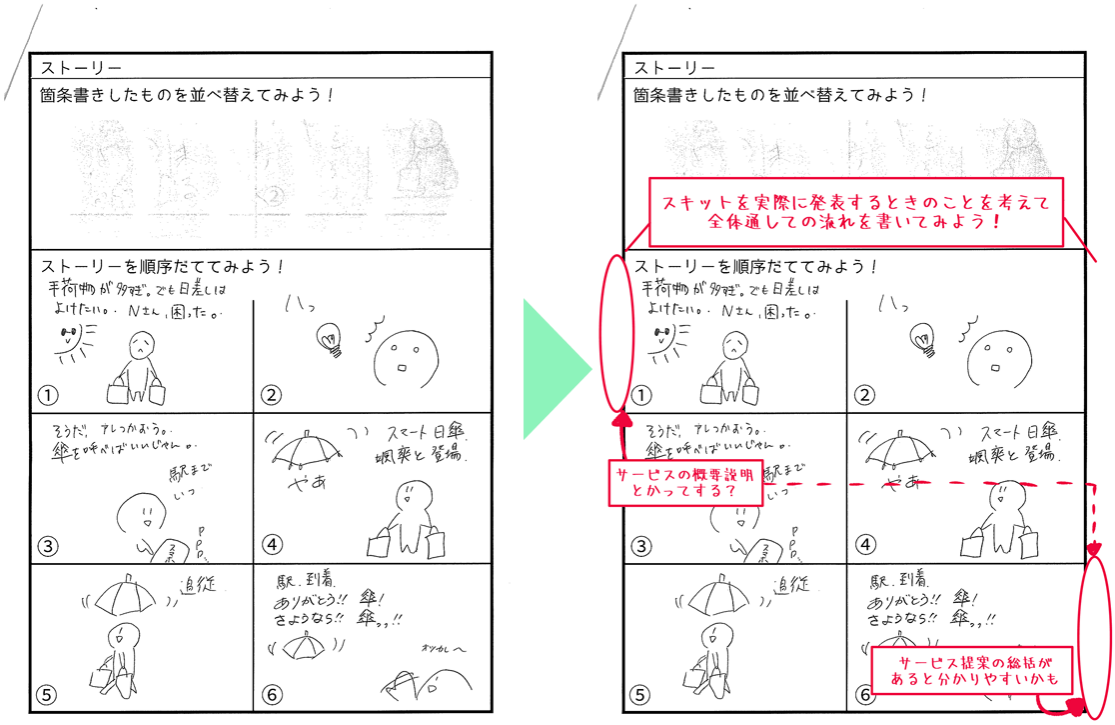

図 19　B グループワークシートの一部とそのフィードバック

次にワークシートを回収し、先程決定した基本構成に基づいてストーリーの添削を行う。上の図 18、19 は全 5 班に行ったフィードバックの内 2 班(A グループ、B グループ)を選んだものである。この 2 班はワークシートに記載された構成から最終発表に至って大きく変化している。

A グループの記入したワークシートでは、ストーリーの構成は大まかに完成していたが、各要素での行動による効果についての分析が不十分だと感じた。そこでストーリー内部の項目にどのような意図や目的があるのかを考えるようフィードバックにて指摘した。

B グループの記入したワークシートでは、スキット内で演じる寸劇部分の構成はできていたが全体を通したストーリーラインが未熟な状態であった。よってフィードバックにてスキット全体の構成が一本のストーリーラインとなるような指導を行った。

5.5　フィードバック後の内容変化

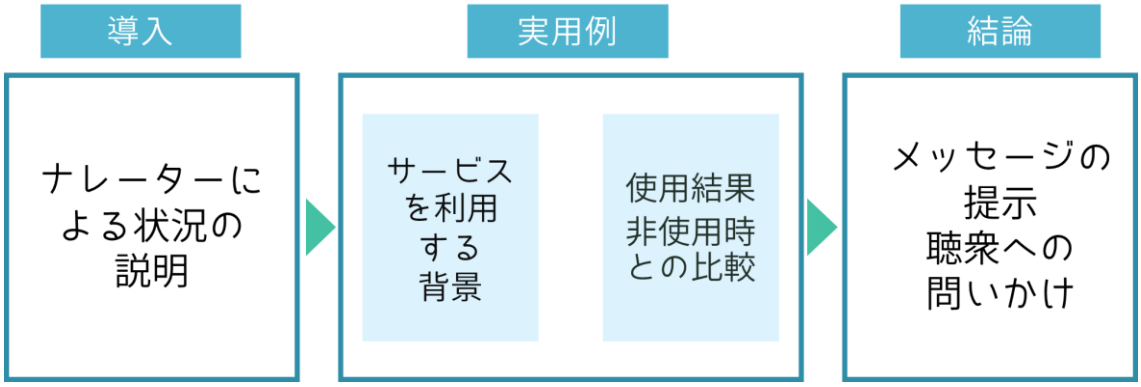

図 20　A グループの最終発表時の基本構成

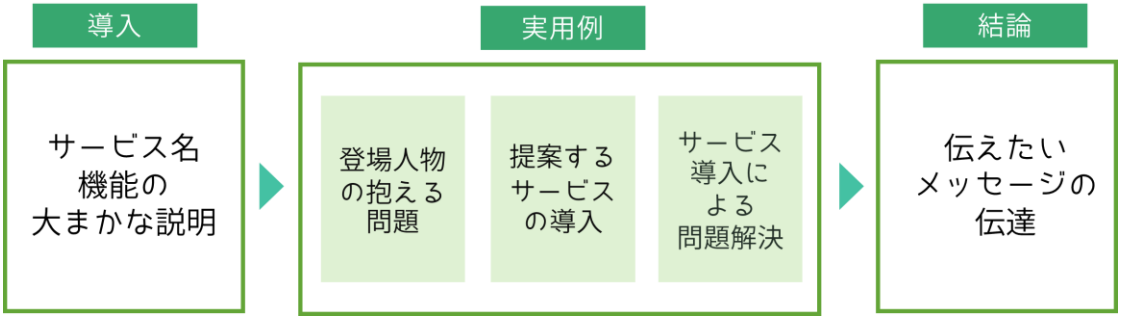

図 21　B グループの最終発表時の基本構成

上の図 20、21 はフィードバック実施後に行われた最終発表での A グループ、B グループの基本構成である。

A グループは以前のワークシートでは無かった結論の項目が追加され、一本のストーリーラインが構成されていた。

更に実用例が『サービスを利用した場合と利用していない場合の比較』という形式に変更されており、メッセージ性がより視覚的に感じやすい形式となっていた。項目が持つ目的、効果への理解が深まっているといえる。

B グループは以前のワークシートでは無かった導入の部分と結論が追加されていた。最後の結論ではメッセージを視覚的に表現しており、全体を通して効果的なメッセージの伝達を行えたスキットであったと感じた。

5.6　参加者によるワークシートの評価

Aグループ参加者	ワークシートに関する評価
a	演劇的表現により聴衆に与えられる効果を実感できた
b	シチュエーションを分かりやすく作ることができた
c	寸劇内で本質的なメッセージを理解して伝えられた
d	改善する優先度が分かるといいと思う

表 11　B グループからのワークシートに関する評価

Cグループ参加者	ワークシートに関する評価
e	アウトラインの制作が容易だった
f	場面の状況・状態を分かりやすく伝えられた
g	聴衆の興味・関心を惹くことができた
h	スキットの構造が分からなかったがワークシートに従って考えられた

表 12　C グループからのワークシートに関する評価

上の表 11、12 は最終発表後に参加者から得たスキットに関しての感想の内 B グループと C グループのものを選びまとめたものである。

スキットを作成するにあたり『スキットの考え方、構造が分からない』といった意見があり、そのような参加者からはワークシートにストーリーや台詞を順序だてる項目が役に立ったという評価が得られた。またワークシートの利用によってスキットで伝達すべきメッセージを深く理解できるようになったという意見もあった。

また行ったフィードバックの改善点として『改善すべき点に優先度をつけてほしい』という指摘があった。

5.7　実施結果の分析、考察

今回のスキット作成において配布したワークシートとフィードバックは、各班の発表内容を構成する要素とその要素が持つ目的・効果の具体化に貢献したと思われる。スキットを構成していくにあたり参加者達はその論理構成を理解していないことが多く、自分達がどのような脚本を書くべきかに悩んでいる部分が大きかった。今回配布したワークシートの手順に従ってストーリーの順序だてを行い、論理構成を理解している人間からのガイドを受け取ることで演劇として成立するスキットの作成が可能となったのではないかと考える。

ただし今回のワークシートでは正しいストーリーの構成とその構成要素が持つ目的・効果を理解させることに成功したのみで、内容とその効果に沿って各要素に適した表現技法にするという演出的アプローチには至ることができなかった。これは演出をつける為には

役者が演じる脚本の持つメッセージと自らの役割を深く理解している必要があるからである。また参加者からの評価でもあった通り、フィードバックを行う際は改善すべき点に優先順位をつけ、全体の改善への方向性を指し示す必要があると感じた。

第 6 章　結論

6.1　結論

4 章での実験では、プレゼンテーションに演劇的要素を付与する為に演劇基本構造を作成し、それに基づいて対象者二人のプレゼンテーションに演劇的感情表現のガイドラインを指導した。

その結果、両方のプレゼンテーションにおいて全体的な感情表現は大きく観測できるようになり、ストーリーが演劇基本構造に合致したものとなった。しかし目標としていた、ストーリーの内容とその効果に沿って各要素に適した表現技法に変更していくという発表は観測することができなかった。これには演劇における脚本の不完全性・曖昧性が原因であると考えられる。演劇的感情表現に差異をつけてメリハリのある発表にする為には、基盤であるストーリーの持つ構成要素とその要素が持つ目的・効果について本質的な理解を促す必要があることが分かった。

次に 5 章で行った実験では、スキット発表を行うグループに対してストーリーの基本構造を理解させる為ワークシートの作成と配布、記入事項に関してのフィードバックを行った。

結果としては各グループがストーリーを作成する際にフィードバックを参考とし、基本構造に則った発表を行うことを可能とした。

発表後に回収した評価としては、ストーリーを構成する要素が伝達したい効果などを理解して発表に臨むことができたという意見が挙がった。またフィードバックへの改善点として、改善すべき点の優先度が欲しいという意見も出た。

6.2　演劇的プレゼンテーションへの改善策

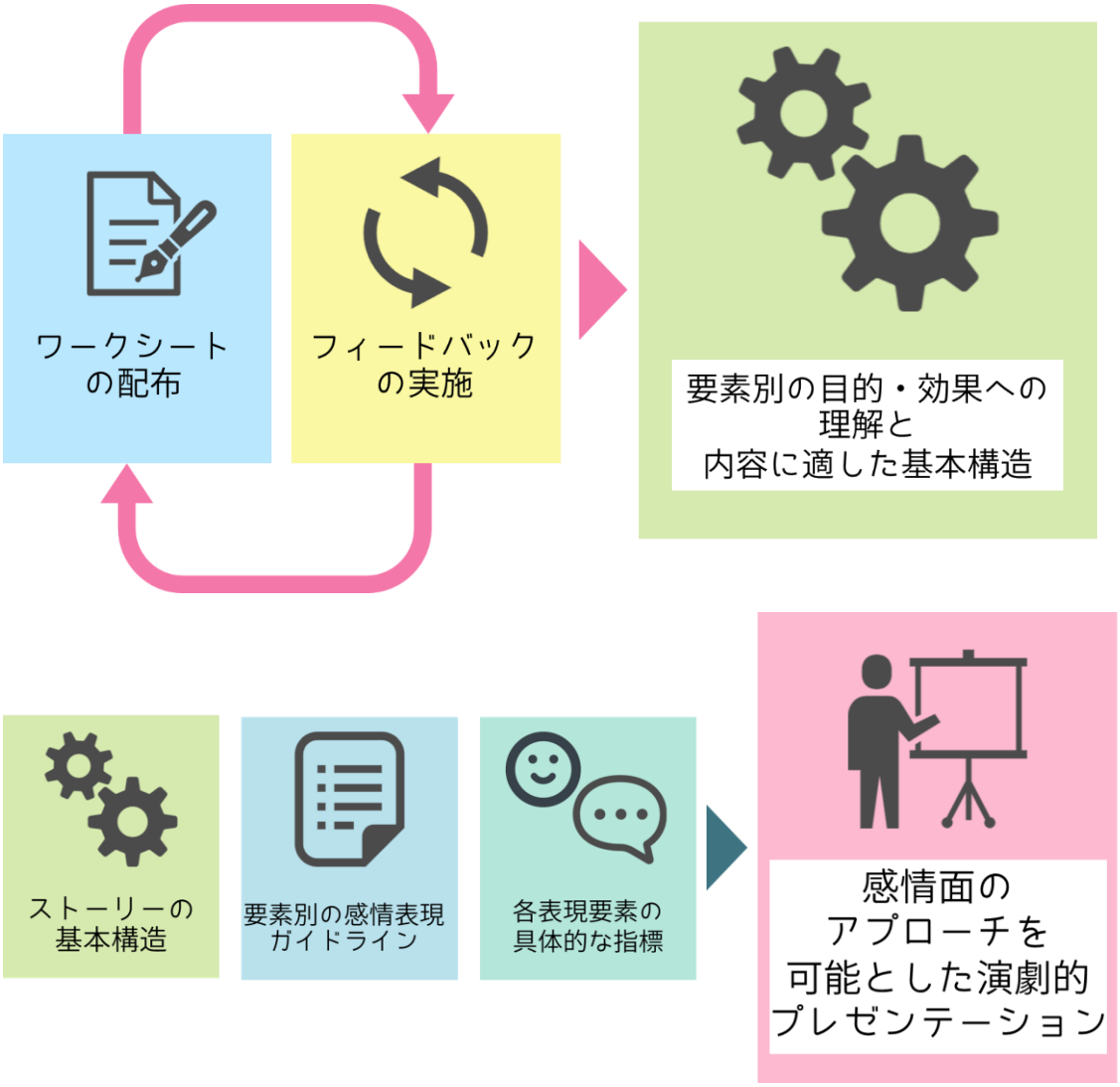

図 22　演出技術を導入するプレゼンテーション制作方法の改善案

今回の二つの実験を通して、意思伝達を感情の面で効果的に行う為のプレゼンテーションを可能にするには図 22 に示したような手順を行うことが有効であると推測した。

まずプレゼンテーションを作成する前に論理構成を把握する為のワークシートを作成し、配布する。そして発表者にはそのワークシートの記入を行ってもらい、その記入内容に対してフィードバックを実施する。フィードバックの内容としてはストーリーに適した論理構成の形状をしているか、各構成要素が担っているメッセージの目的や効果を理解しているかという二つの点への指導である。

そしてそのワークシートへの記入とフィードバックを繰り返し実施することで、各発表者のストーリーに適応した専用の基本構造が完成する。構成要素が明らかになっている為、各項目で表すべき効果への理解も深められるかと推測する。

ストーリーの基本構造が決定した後は、その基本構造に従って作成した要素別に感情表

現を変化させる為のガイドラインを作成する。またそのガイドラインが示す指標の具体的内容を理解しやすくする為のビデオや写真、音声データ等の視覚的・聴覚的な資料の準備があると発表者が表現の差分を実行しやすくなるかと考える。

以上の三つの資料の作成、準備を行い、発表者へ直接演出的指導を行うことで、感情面で効果的なアプローチが可能となるプレゼンテーションの実現に繋がるのではないかと提案する。

謝辞

本研究は、静岡大学情報学部行動情報学科湯浦克彦教授のご丁寧なご指導のお陰で実施することができました。湯浦克彦教授に実験に関するご助言や専門知識のご教授、論文執筆では構成に関するご助言を賜りました。この場を借りて心より厚く御礼申し上げます。

また、副査として研究内容について御助言をいただきました静岡大学情報学部情報社会学科原田准教授にも深く感謝いたします。

そして、本研究において実験の参加者としてご協力していただいた湯浦研究室の 3 年生、並びに知的情報システム開発を受講された 3 年生の皆様にも心より御礼申し上げます。

最後に、研究、論文執筆を進めていくにあたりご助言を頂いた湯浦研究室の先輩・後輩、共に励まし合った同期にも感謝いたします。ありがとうございました。

参考文献

［1］『大辞林　第三版』―三省堂(2006 年)

［2］著者:ナンシー・デュアルテ　『Slide: ology　プレゼンテーション・ビジュアルの革新』―ビー・エヌ・エヌ・新社(2014 年 12 月)

［3］著者:山口顕司　『卒業研究指導の一環として実施したプレゼンテーションスキル教育の試みとその教育効果』―https://www.jstage.jst.go.jp/article/jsee/55/1/55_1_1_41/_pdf/-char/ja(2007 年)

［4］一般社団法人日本経済団体連合会ホームページ　Policy（提言・報告書）ページ 2018 年 11 月 22 日　新卒採用に関するアンケート調査結果 PDF ―https://www.keidanren.or.jp/policy/2018/110.pdf(2018 年)

［5］全国高等学校演劇協議会　著作権ガイドラインより抜粋 ―http://koenkyo.org/?page_id=6340(2019 年)

[6]著者:鴻上尚史　『演技と演出のレッスン　魅力的な俳優になるために』―株式会社白水社(2011 年 12 月)

[7]情報処理学会 第 139 回 CE 研究発表会 「プレゼンテーション制作法に関する学生向け学習方式」金ヨンソ（静岡大学大学院)、湯浦克彦（静岡大学）

[8] 著者:菅野誠二　『外資系コンサルのプレゼンテーション術―課題解決のための考え方＆伝え方』―東洋経済新報社(2018 年 1 月)

[9] 著者:井庭崇＋井庭研究室　『プレゼンテーション・パターン―想像を誘発する表現のヒント』―慶応義塾大学出版会株式会社(2013 年 2 月)